**【プロローグ】**

　それはどこにでもある話だ。

　――かつてすべてを愛した少女がいた。

　彼女ほど世界を愛し、自然を愛し、動物を愛し、人を愛した者はいなかった。

　彼女の愛は本物だった。

　故に、絶望も本物だった。

　親愛を裏切られた彼女は、自らを魔王と称し世界のすべてを敵に回し戦い続けた。怒りと失意に狂った孤独な戦いではあったが、それでも彼女の眼差しはどこまでも愛と誇りに満ちていた。

　やがて力尽きた彼女だが――

　その怨念はカタチとして残り、今もこの世にとどまり続けているという。

　つまるところ、この学園には幽霊が出る、らしいという……

　ただ、それだけの話だ。

　　　　　　§

　ぎし、ぎし、ぎし……

　暗闇に足音が響いていく。子供の小さな足音は、しかし沈み込むような沈黙の中、予想以上の大きさで反響し耳に届く。それがまた少女の精神を緊張させ、すり減らせ、過敏にさせていく。

「……」

　懐中電灯の灯りが、夜闇を割いた。

　どこか埃っぽい空気は――長い間、ひと気がなかったが故か。木造の廊下は古ぼけ傷んでおり、活気を失い朽ちるだけのそれはもはや廃屋寸前の有様と思えた。

「……」

　息を潜めて、少女は歩く。

　一歩ずつ、着実に、踏みしめるように。

　ぎし、

　ぎしぎし、ぎし……

「――ビビりすぎよ。バカなの？」

「ひゃう！？」

　急にかけられた声に大げさに肩を震わすと、少女は爆発しそうなほどドキドキしている胸を押さえながら恨めしそうに振り返った。

「いきなり声をかけないでほしいのじゃ！　お、驚くではないか！」

「ふぅん」

　よほどビックリしたのかゼェゼェと荒い息を吐く黒髪の少女に、声をかけてきた銀髪の少女は呆れたように鼻を鳴らす。その隣では、ふたりよりもちょっとだけ年上らしい白い髪の少女が苦笑いを浮かべていた。

　黒い髪の少女と、銀の髪と、白い髪の少女。

　彼女たちは実の姉妹であり――同時に、学園の初等部に通う生徒である。

　黒歴史学園。

　人間だけに限らず、神や悪魔、精霊や獣人などなど、文字通り多種多様な生徒が集い学ぶこの学園には、すでに使われなくなって久しい旧校舎がある。木造四階建てのそれは新校舎とほぼ同等という広大さを誇るものの、今やカビと埃にまみれ、外観も雑草やコケに覆われすっかり廃校舎の体をなしていた。

　どうして取り壊されないのか。

　取り壊さないのならば、きとんと管理しないのは何故なのか。

　古くから様々な噂と怪談の舞台となった旧校舎は、もちろん絶好の度胸試しの場でもある。それは学園側もわかっており、基本的に生徒の立ち入りは許されてはいない。なのに少女たちが旧校舎にいる理由といえば簡単で、理事長室から鍵をくすねてきたからだ。

　目的はもちろん、肝試し。

　主犯はもちろん、黒髪の少女だ。

　もっとも――

　少女の威勢が良かったのは、本当の本当の本当に、最初だけ、なのだが……

「……ったく、そんなやわい心臓で、よく肝試しなんて言えたわね。感心するわ」

「ち、違うのじゃ。暗いからちょっと慎重になってるだけなのじゃ。あ、明るければ――そう、そうじゃ！　太陽さえ昇っておれば、こんな所どうってこともないのじゃ！」

　何故かえっへんと胸を張る黒髪の少女。

　銀の姉は「あ、そう」と冷めた眼差しを向けてくるのみだが、反対に白い姉はどこか感心したように妹を見つめていた。

「それは……ちょっとすごいかも。私、昼間でもこういう所は苦手だから」

　埃っぽい空気。

　傷んだ建物。

　活気とは無縁の、ただ、朽ちていくだけの世界。

「だって、ほら」

　白い姉は不安そうな顔で、言った。

「こういう所って、お化けが出そうじゃない」

「……」

「……」

「……あれ？」

　沈黙。

　微妙に重くなっていく空気に、白い姉は穏やかじゃないものを感じて小首を傾げた。一方、銀の姉は淡々と、しかしわずかに口の端を笑みの形に歪め、どこか視線が泳いでいる黒髪の妹へと話を振る。

「……そういえば、知ってる？　噂のこと」

「知らないのじゃ」

「かつて世界を支配しようとした魔王の亡霊が――」

「知らないのじゃ」

「失われた血肉を求めて学園を――」

「知らないのじゃ！」

「夕食はマイお手製の肉じゃがだって」

「知らないのじゃ！！」

「にゃんぽこー」

「知らないったら、知らないのじゃー！！」

　耳をふさぎ目を閉ざし、少女は声を荒げる。

　膝を抱え込んだその姿は、怯える小動物のようで少しだけ可愛らしく見えないこともない。もっとも、この肝試しを勝手に企画し姉ふたりを巻き込んだ首謀者の有り様としては、悲しくなるくらい滑稽でもあった。

「…………。……お姉さま、私、こいつが肝試しをやりきれるとは、到底思えないのだけれど」

「それは……ええと」

「帰っていい？　というか帰りましょう？　もう飽きた」

「そういうわけにも……放っておけないし」

「えー。でも――」

「――ふ、ふん！」

　少女はふらふらと立ち上がると、姉ふたりへと懐中電灯をびしりと突きつける。

　眩しさに、銀と白の姉は目を細めた。

「か、帰りたければ勝手に帰ればいいのじゃ。わらわの偉業に必要なのは、それを見届けられるだけの気骨ある者のみ。……ああ、ああ。そうじゃ。そうなのじゃ。負け犬はツノと耳を折り曲げとっとと帰るがいいのじゃ！」

「眩しいんだけど」

「あ、すまぬ」

　少女は懐中電灯をささっと下に向ける。

　再び夜に沈んでいく姉ふたりの視線は、片や冷たく、片や生温かかった。

（むぅぅ……このふたり、嫌いなのじゃ）

　今更ながらに人選を悔いる。

　帰宅した時、家にはふたりの姉と使用人たちしかいなかったため、仕方なくこのメンバーで妥協したのだが……結果として大失敗だったとしか思えない。白い姉は心配症で頼りなく、銀の姉は性格が悪かった。自分の華やかなりし武勇伝の従者としては役者不足と言わざるを得ないだろう。

　ちなみに、少女的にはもっと頼りになりそうな他の姉妹――例えば赤い髪の姉や尻尾を生やした姉を従者にしたかったのだが、残念ながらふたりとも捕まらなかった。

　まぁ、捕まえられたところで付き合ってくれるかどうかはわからないのだが。尻尾の姉は委員会活動で忙しく、赤い髪の姉にいたっては学園の生徒ですらない。特に尻尾の姉は銀の姉とは別ベクトルで性格が合わないため、いきなり怒られる可能性もあった。というか、理事長室から鍵を持ちだしたことがバレたら絶対に叱られ折檻される。想像しただけで軽く寒気が走り、身震いした。

　そう思うと、このメンバーも悪手とは言い切れないのかも知れない。

（――姉上が生きていたら、どうしたのじゃろう）

　ふと思う。

　今はもういない、青い髪の姉を。

　自分がもっともライバル視し、だけどもっとも信頼していた、姉のことを。

　彼女は付き合ってくれたのだろうか。

　それとも、断ったのか。

「…………ふん、嫌な姉じゃ」

「ん、何か言った？」

「なんでもないのじゃ！」

　その時だった。

　ぎし、ぎし、

　　　　　　　ぎし、ぎし、

　　　　　　　　　　　　　ぎし――…………

　音が聞こえる。

　ついさっきまで嫌でも耳に響いてきた、音が聞こえる。

「む、なんじゃ……？」

　音のする方向――姉ふたりの背後、階段の踊り場へと灯りを向ける。

　と――

「……！？」

　衝撃に息を呑み、思わず懐中電灯を落としてしまう。乾電池が外れたのか灯りは消えて、旧校舎はより深い闇へと沈んでいく。だが、そんな事は瑣末だった。

　見てはいけないモノを、見た。

　見間違いに違いないと、ただの幻覚だと必死に自分に言い聞かせようとするも、自分すら騙せない嘘に説得力などありはしない。思えば思うほど、今見た光景は事実として深く焼き付いてはなれなかった。

「なに、どうしたの？」

「あ、ああ、ああああ、あああああ、あああ……」

　怪訝そうな銀の姉と白い姉に、少女はうまく応えることができない。先程までとは別種の、しかし同質の恐怖に全身がすくみ、声が詰まる。そのただならぬ様子に姉たちも後ろへと振り返り――……首を傾げた。

　妹と違い夜目が効くふたりは、懐中電灯などなくても暗闇をものともしない。

　そんな彼女たちが見たものは、……何もなかった。

　それは文字通り。

　人も、動物も、虫の気配すらなく――旧校舎の古ぼけた踊り場があるだけだ。

「……何も、ない、けれど……」

「ビックリした。どこかの体育教師がぬっと現れたのかと思ったわ。アレ、顔ちょー怖いから、こんな所で会ったらさすがの私もヒヤッとするわね」

　困惑する白い姉と、早々に軽口を叩く銀の姉。

　……ふたりは見なかったのだ。彼女たちが振り返った時には、ソレはすでに少女の視界からも消えていた。だから姉たちの反応は当然といえば当然なのだが……ああ、アレを見ることなくすんだなんて、なんて幸運なのだろう！

「……出たのじゃ」

「え、体育教師？」

「違うのじゃ！」

　やっとこそ搾り出された声は、恐怖と戦慄に彩られている。

　自然と姉ふたりも、声を潜めた。

「……出たって？」

「まさか……」

「…………、……もちろん、」

「幽霊が出たのじゃあああああああああああああああああああああああ！！！！」

**【1／旧校舎の怪談】**

「――という噂を聞いたのだが、エノクは知っているか？」

「ううん、知らないけれど」

　友人の話にエノクは首を振った。腰下まで伸びた長い青髪がかすかに揺れる。

　黒歴史学園・食堂。

　昨夜から続く雨が、むしっとじわっと鬱陶しい、ある夏の日のことだ。

　夏休みといえども部活や委員会などなど、様々な事情で学園に通う生徒は数多い。そんな生徒たちのために今日も営業してくれている食堂の一角に四人組の姿があった。中等部の二年生である彼らは同じクラス、同じ部活動に所属している仲良し四人組であり、こうして夏休みも定期的に登校し部活動に精進している。

　彼らが所属している部活は、まおうぶ。

　まおうとは魔王であり、つまり将来立派な魔王になるために自己研鑚を行うことを目的として設立された部活である。なんとも不謹慎そうな活動内容ではあるが、いわゆる魔族の出である彼らが魔王を目標に掲げることはおかしなことではなく、そもそも魔王＝悪の権化、なんて考え方がこの学園では古かった。

　そんな魔王部の部長を務めるのは、どこからか怪談話を仕入れてきた少女、レビだ。

　濃い茶髪をポニーテールにまとめた彼女は剣術を得意とする腕っ節の強い少女であり、加えて面倒見の良さと出るトコロは出たスタイルのおかげか地味に男子からの人気が高かったりもする。一番人気には及ばないが、常に三番手か四番手をキープしている、そんな立ち位置の少女なのだ。……無論、本人に自覚はないが。

「ふむ、そうか。エノクは初耳か」

「旧校舎の幽霊の怪談だったら知ってるけど、具体的に見たって話ははじめてだよ。それ、出処はどこなの？」

「初等部だ。どうも本当に肝試しを行った生徒がいるらしくてな、そこから幽霊騒ぎが広まっているらしい」

「へぇ……」

　あまり興味無さげに相槌を打つと、エノクは食後の紅茶を口へと運ぶ。その様子はとても絵になっており、こんな食堂ではなく然るべき舞台を与えたならば、それだけでいくつもの芸術作品が生まれるであろう圧倒的な美しさであった。

「……どうかしたの、レビさん？」

「いや、なんでもない」

　思わず見とれていた自分を恥じ、レビは軽く首を振る。

　別にレビにソッチノケがあるわけではない。

　レビに勝るとも劣らない――というか確実に勝りまくっている男子人気を誇るだろうエノクは、長い青髪と大きなリボンが特徴的な、可愛らしさと美しさを高次元で両立させた絶世の美少女――もとい、美少年である。本人はどういうわけか女子制服を着用しているし、いまだに大半のクラスメイト（主に男子）が信じていないが、彼は彼女ではなく彼なのである。

　故に、レビにソッチノケなどありはしない。

（……アレと同じ性別なんだよな）

　なんだか鈍い痛みが走っている気がするこめかみを押さえながら、レビはエノクの隣でカツ丼（二杯目）をガツガツと平らげている少年へと目を向ける。エノクも自然とその視線を追った。

「……ん、なんだ？」

　両者の視線に気がついたのか、ドンブリから顔を上げ、朱色の髪をリーゼントにまとめた少年――ガラテヤは眉をひそめた。

「……やらないぞ」

「いらん」

「どうしてもというなら、やらんこともない。ただし間接キスだ。ひとくち食べたら俺に返せ」

「いらんといってるだろーが」

　本気で嫌そうに顔をしかめるレビ。

　ガラテヤは拗ねたように鼻を鳴らすと、再びカツ丼にがっつきはじめる。そのあまりの食べっぷりの良さに、エノクは少しだけ興味を引かれた。

「それ……おいしいの？」

「おうよ。絶品だぜ。エノクも食うか？」

「……。……いや、なんか、いい」

「そうか？　お前はホント食が細いよなぁ。そんなんだから女みてーな外見してんじゃね？」

「……余計なお世話だよ！」

　エノクは唇をとがらせる。

　どんなに美少女に見えようと、エノクは少年である。女の子と間違われて嬉しいはずもなく、むしろ男としての矜持を傷つけるものとして嫌っている。なのに、拗ねている姿は可憐な少女のようで――なんともチグハグした少年であった。

　それはともかく。

「――お前は知っているか、ゼパニヤ？」

「僕ですか？」

　レビに話を振られたのは、四人組の最後のひとり、黒髪をオールバックにした少年だ。

　彼の名はゼパニヤ。礼儀正しい――というかむしろカタブツである彼は、カレーライスを食べ終わると友人たちをたしなめるように意見を述べる。

「幽霊騒ぎについては、正直、くだらないと思います」

「ほう？」

「学生の本分は学ぶことです。遊ぶことも悪いとは言いませんが、ハメを外し過ぎてはいけません。件の初等部の生徒も、これに懲りたら真面目に勉学に励むべきでしょうね」

「なにつまんねぇこと言ってんだか。こいつは」

　カツ丼をかき込みながら、ガラテヤはバカにした口調で言う。一瞬ムッとした表情を浮かべるゼパニヤだが――自分が面白味のない男であることは自覚しているため、特に反論はしなかった。

「噂の幽霊だって、おそらく初等部の生徒たちの見間違えでしょう。怖い怖いと思えば、ススキでさえお化けに見えてくるものです。死後の世界なんて存在しません。死んでしまえばそれで終わり。だからこそ人生は尊いのですから」

「そうかな」

　エノクは反論する。

「人生が尊いっていうのは否定しないけど。幽霊の有無については、否定しなくてもいいんじゃないかな？」

「……と、いうと？」

「うん。幽霊はいるとその人が信じるなら、正体なんて関係ないよ。人の想念は時として現実すら凌駕する――それはゼパニヤさんも知ってるでしょ」

　召喚術、という魔法体系がある。

　術者の思い描く空想を現実に顕現させる――魔法の類は多かれ少なかれそういう特性を内包している場合が多いが、召喚術はその一点にのみ特化した術だ。つまり、自分の妄想を短時間とはいえ具現化させる技であり、捉えようによっては神の領域に踏み込むにも等しい行いなのである。

　当然その使い手は限られており、そうそうお目にかかれるものではない。……の、だが。

「……だから、僕はその気持ちを否定しちゃいけない気がする」

　エノクは胸から下げたペンダントをいじりながら、呟くように言う。

　この少女としか思えない少年は、召喚術師だ。ペンダントに飾られた宝石を媒介とし、自らの想念で世界を侵す。だからこそだろう。彼はゼパニヤの理屈を正しいと思いつつも、その裏で殺されていく想念を捨ておくことはしたくなかった。

　ようするに、迷信のたぐいを信じていたい性分なのだ。

「……なるほど、召喚術師らしい考え方ですね」

　ゼパニヤは友人の話に興味深そうに耳を傾けていたが、自らの考えを整理すると、

「ですが、その理屈なら僕が信じないという以上、僕の世界では幽霊はいないことになります。いると思う想念と同じく、いないと思う想念もあって当然。結局、信じる寄る辺をどこに抱くか、という問題でしょう」

「それは……そうだけど」

　エノクは少し戸惑った。

　ゼパニヤは確かに理屈で物事を考える友人ではあるが、ここまで頑ななのも珍しい。空想を力にする召喚術師と自分の肉体を武器にする武闘家という違いからか、今までも何度か意見を語り合ってきたのだが――その時は、もうちょっと穏やかだった気がするのだ。

「ふむ」

　黙って聞いていたレビだったが、突然、相槌を打つ。

「ではこうしよう。我々の目で真実を確かめに行くんだ」

「……は？」

「だから――……旧校舎に、忍び込むんだ」

　周りの生徒に聞こえないよう、小声でレビはとんでもないことを言い出した。初等部の生徒みたいな提案に、ゼパニヤは露骨に顔をしかめ、エノクも困り顔を浮かべる。ガラテヤは食後の麦茶をゴックゴックと飲み込んでいる最中だった。

　……ややあって、口を開いたのはゼパニヤだ。

　どこか悪戯っ子のような微笑を浮かべるレビの表情を魅力的だと思いながらも、常識にとらわれて生きている少年に、それを素直に賛辞する道理は見つからない。

「……レビさん。不法侵入はいけませんよ」

「それがどうした。細かいことは気にするな。我等四人は魔王部――夜の悪を説く魔王を志す仲間ではないか」

「ですが」

「俺はやだぞー。めんどくさい」

　爪楊枝を口の端に咥えながら、ガラテヤが言う。

「だいたい幽霊なんてどうでもいいだろ。そんな事より俺は、レビのパンツの色が知りたい」

「美女幽霊らしいぞ」

「おっしゃああああああああああああああああ！！　いくぜ旧校舎！！」

　ガタリ、と椅子を倒す勢いで立ち上がりガラテヤは声を張り上げる。

　当然、食堂の生徒たちから怪訝な眼差しを向けられる。夏休み中だけあり、決して大勢の生徒がいたわけではないが――それだけに突然ハイテンションで旧校舎がどーのと騒ぎ出したガラテヤの存在は目立っていた。

「……このおバカは」

　悪巧みの相談をしているという自覚がないだろう友人に、ため息をつくレビとゼパニヤ。

「――――ちょっと、あなた達」

　そしてこれまた運が悪いことに、悪目立ちした生徒の元へと風紀委員がやってくる。おそらく食堂で昼食をとっていたのだろうが、不穏な気配に律儀に反応してくるあたりはさすが風紀委員といったところか。伊達に生徒会と勢力を二分していない。

　もっとも大半の生徒にとっては鬱陶しい存在であることに変わりはなく、ガラテヤもこんな雨の日に、しかも夏休みまでお仕事熱心ご苦労様ですねと内心ぶーたれながら、風紀委員の腕章をつけた少女へと素早く視線を走らせた。

　中等部の制服を着ているが、おそらく年下だろう小柄な金髪の少女だ。美少女ではあるのだが――残念ながら色気がない。ろくな起伏をみせない胸元に目をやった時、ガラテヤのテンションは著しく損なわれた。しおしおとリーゼントが枯れていく。

「今、旧校舎がどうのって聞こえたけれど」

「そーっすか？」

　おとなしく席につくと、完全に投げやりな口調と態度でガラテヤは返す。風紀委員の少女は腕章を直すと、悪態をついている（ように見える）ガラテヤとその友人たちへと聴取をはじめる。

「わかってると思うけど、あそこは立入禁止よ」

「……ああ、大丈夫だ。わかってるさ」

　ガラテヤの代わりにレビが応える。

「なに、ちょっとした噂話をしていただけだ。幽霊が出るとか、その手の良くある怪談だ。食後の雑談の種になっていただけで、忍び込むなど、やるはずがないだろう？」

「幽霊？　……ああ、噂になって――」

　金髪の風紀委員は疲れたような顔を見せる。

「サナの奴、ほんと、どうでもいいことにばかり労力使って……ったく、また面倒事起こさないでしょうね……」

「ん？」

「……なんでもない」

　ぶつぶつ独り言をつぶやいていた少女は、ため息をつくと首を振る。

「わかってるならいいわ。あそこは老朽化もしてて危ないから立入禁止なの。風紀委員としてお願いするけれど、危ない真似はしないでちょうだい」

　くるりと背を向け、少女は自分の席へと戻っていく。食事は終わっていたらしく、そのままトレイを手に取り返却口へと向かっていった。

　それを、見届けると。

「いやぁ、生意気なガキだったなぁ。先輩に対して敬語くらい使い給えよ」

　なぜだか上機嫌そうに、ガラテヤは言う。

「……どうかしたんですか、ガラテヤさん？」

「いやぁな。――なぁ、エノク」

「はい？」

「今の風紀委員、なかなかいいケツしてたと思わないか？　ありゃあもしかしたら化けるかもしれんぜ」

「……君、初対面の僕にも同じこと言ったよね？」

「俺は今でも信じてるぜ」

　ガス！

　……テーブルの下でレビに思いっきり足を蹴られたガラテヤが無言で苦悶の表情を浮かべているが、そんな事はどうでもいいとばかりに、魔王部の部長は話を旧校舎探索の件へと戻していく。

「とにかく、幽霊探索は行うぞ。決定事項、部長命令だ」

「ですが……」

　やはり不満そうなゼパニヤへレビは言う。

「伝説の魔王が化けて出るというんだ。その志を継ごうという我らが出向かなくては魔王部の名折れだろう？　……それとも、魔王の幽霊には興味ないか？」

「――そういうわけでも、ないですが」

「なら決まりだ。共に行こう」

「……わかりました。お付き合いしましょう」

　結局、ゼパニヤは折れることとなった。

　不法侵入への抵抗は依然としてある。しかし自分が反対したところでレビは意見を変えないだろうし、最終的には置いて行かれるだけだろう。風紀委員の言うとおり旧校舎には危険もあるし、友人たちを黙って見送るようなことはしたくなかった。

　それに――魔王の幽霊というものに、少なからず興味があるのは嘘ではない。

　渋々と頷いたゼパニヤに、レビは満足そうに微笑んだ。

「エノクもいいな、幽霊探索」

「え、……うん、別に構わないけど」

　正直なところ、エノクは今回の噂の真偽についてはどちらでもよかったりする。何故なら彼が信じたいのは幽霊そのものではなく、幽霊がいると信じる心なのだ。エノク自身は幽霊の存在については肯定も否定もする気はせず、有りがままを受け入れるだけだ。

　ただ、これだけは、思う。

（……幽霊がいたら……きっと怖いだろうなぁ）

　エノクはそっと、紅茶へと口付けた。

**【2／旧校舎の謎】**

　そうして、数日後の――夜。

　いつもより大きく明るく見える満月が輝く中、魔王部の四人は旧校舎前に集合していた。

　四人とも制服姿に、懐中電灯や飲料水が入ったバッグ、そして何かあった時のために――何もないとは思うのだが――最低限の武装を身に着けている。レビは帯剣しているし、ゼパニヤはグローブを、エノクはいつも通り召喚術の媒体となる宝石を、ガラテヤはカメラを装備していた。

「……って、おい」

「なんだよ？」

　首を傾げるガラテヤに、レビは半眼でツッコミを入れる。

「そのカメラ、なんの役に立つんだ」

「心霊写真撮れるぜ？」

「本音は？」

「ふわふわしてる幽霊ちゃんのスカートの中を激写したい」

「……。あ、そう」

　なんかもう相手にするのも疲れるので、レビは放置を決め込んだ。

「さて、それでは行こうか」

「うん。……そういえば、どうやって入るの？」

「任せろ。下調べはバッチリだ」

　エノクの疑問に、レビは自信たっぷりに頷いてみせた。

「旧校舎は東校舎と西校舎、中央校舎に分かれているだろう？　私たちがいるのは西校舎前。ここから先、東と西をつなぐ中央校舎のひとつに建てつけの悪い窓があるんだ。そこを外せば入ることは可能だ」

「……」

「なんだ、その顔は」

「それ、誰かから聞いたの？」

「いや。昨日、私が一階の窓を調べて回った」

「……レビさんって、たまにすごい方向に努力するよね……」

「ふ……そう褒めるな」

　四人はレビを先導に建てつけの悪い窓とやらを目指し歩いて行く。長年人の手が入っていない旧校舎の外観は相当痛んでおり、見ようによっては月明かりによく映えていた。たしかにこれなら肝試しの舞台としてふさわしく、幽霊のひとりやふたりくらいいてもおかしくはないだろう。

「あそこだ」

　中央校舎のとある教室。レビはその窓のひとつを指さすと――……顔を曇らせた。

　懐中電灯を窓へと向ける。

　…………窓はすでに、外されていた。

　顔を見合わせるレビ、エノク、ゼパニヤに、ガラテヤが気の抜けた声を出す。

「お、開いてるじゃん。ラッキー♪」

「……どうだかな」

　慎重にレビは旧校舎へと入り込んだ。エノクたちも後へと続く。四本の懐中電灯の灯りが闇を払拭し、かつての活気の残滓を浮かび上がらせる。机に、椅子、ロッカーに黒板。教室の風景は新校舎とさほど変わりはなく、埃にまみれた教室は哀愁さえ感じさせた。

「……みなさん、これを見てください」

　ゼパニヤが足元へと懐中電灯を向ける。

　そこにあったのは――明らかに四人のものとは違う足あとだった。靴にこびりついた泥が形作った足あとは、乾き具合からして数日前、おそらく雨が降った翌日に誰かが残したものだろう。それは教室を横切り廊下へと続いている。

　四人は廊下へ出た。

　足あとは、旧校舎の奥へと向かっていき……、徐々に薄くなり、消えていった。

「肝試しをやったっていうガキたちか？」

「時期が合わない。……そもそも、子供の足あとではないだろう」

　ガラテヤの疑問に、レビは首を振って応える。その表情は真剣で、目つきはまるで戦闘前のように鋭かった。

　数日前に誰かが残した足あと。

　外されていた窓。

　――導き出される答えは、ひどく、単純なものだった。

「どうやら、幽霊とやらの正体も見えてきたな」

　同時に、もっと重大な問題が浮かび上がる。

　幽霊ならただの噂や見間違えですむ。実害はなかった。だが、誰かが秘密裏に旧校舎に出入りしているとなると話は違ってくる。それも、おそらく幽霊騒動が起きる前からだ。こうなると不審者が何かを企んでいる可能性さえ浮上してきた。

　ゼパニヤは額の汗を拭うと部長へと問いかける。

「どうします、レビさん。引きますか？」

「……いや。もう少し様子を見よう」

　おそらく――この旧校舎には何かがある。最善手は今すぐ引き返し教師陣にこの件を報告することだろう。しかし魔王部としてそれははばかられた。仮にも魔王を目標と掲げるのなら、すぐさま尻尾を巻いて逃げるなどあり得ない。最低でも何かしらの情報を得ておきたいところだった。

「……わかりました」

　予想していた答えに、ゼパニヤは気合いを入れなおすと拳を握りしめた。

　エノクもその可憐な顔を精一杯キリリとへの字口にさせ、ガラテヤはカメラを構える。

「ガラテヤ」

「なんだ、レビ」

「話についてこれてるか？」

「ん。幽霊ちゃんを探してるんだろ？」

「ああ、まぁ……、……もうお前はそれでいいや」

「いつまでも俺らしい俺でいるぜ」

　ニカっと笑うガラテヤであった。

　そうして、四人は旧校舎の探索を開始する。

　幽霊探しというある種のアトラクションから一転、不審者への警戒を強めた行軍となったそれは、どこか迷宮探索に挑む冒険者のような錯覚を覚えさせる。四人は慎重に一階校舎の探索を行っていった。

　やがて、東校舎の昇降口にさしかかった時――

　四人は同時に、息を呑んだ。

　…………昇降口が、破壊されていたのだ。

　くたびれた木造校舎は容赦なく打ち壊され、木片やガラス片がそこかしらに散らばっている。その方向から考えて、外から一定以上の衝撃を加えられたのは明らかだった。

「――おいおい」

　顔をしかめるガラテヤ。

「わりぃな、レビ。前言撤回させてもらうかもしんない」

「好きにしろ」

　深く息をつきながら、レビは言う。

　エノクは胸のペンダントをぎゅっと握りしめた。

「とりあえず……何かいる、ということは確実だね」

　それも、こんな凶暴なことを平然とやってのけてしまうような、何かがいるのだ……！

　　　　　§

　一階の探索を終え、二階へと上がる。

　謎の足あとや、昇降口の破壊――異常の痕跡は確認できるものの、人の姿は見当たらない。もちろん幽霊の姿もない。誰かがいるかもしれないのに、その気配をつかめない――極度の緊張が圧力となり、少年少女の心を疲弊させていく。

　ほどなくして、エノクたちは適当な教室で休息をとることになった。

　エノクは持参したシートを広げ、水筒に入っている冷たい麦茶を口に含むと、ほぅっと安堵の吐息をこぼす。部員たちも、それぞれ腰を下ろしていく。懐中電灯を休めるために電源を切ると教室は一気に暗くなった。月明かりだけが頼りの世界は、重苦しい自分たちの心の具現のようにすら思えてしまう。

　もっとも。

「俺、ちょっくらトイレいってくるわ」

　……緊張感とは無縁な人もいるわけだが。

「ひとりで大丈夫？」

「お、なんだエノク。連れションか？　なんか嫌らしい響きだな」

「……いってらっしゃい」

「おうよ」

　ひらひら手を振ると、ガラテヤは教室を出て行った。

　そんな友人を見送りながら、レビとゼパニヤは肩をすくめる。

「……なんだかんだで、いつも通りですね、彼は」

「神経が図太いからな」

「まったく。ここまでくると少しだけ羨ましいですね。彼になりたいとは思いませんが」

「まぁ……貴重な人材だよ」

　レビは苦笑した。

　魔王部を立ち上げたのはレビだ。その後に成り行きでエノクが入部し、次いで魔王という存在を探求していたゼパニヤが、最後にガラテヤが押しかけてきて現在の形になった。

　その際、彼は言っていた。

　魔王を目指しているわけでも、興味も持っているわけでもないと。

　なので実のところ、ガラテヤがどうして魔王部に入ったのか、レビはよくわかっていない。普段は何かとエロい話しかしないし、授業態度も決して良くないし、部活動に励んでいるわけでもない。そのくせサボることはほとんどないのだ。そんな少年だけに、部長としてたまにどう向きあえばいいのかわからなくなる。

　決して嫌いな相手ではないのだが……

「さて……彼のことはともかくとして」

　こほんとわざとらしく咳払いし、ゼパニヤが話題を変える。

「今のうちに、現在の状況を少し整理しましょうか」

「そうだね。頭を冷やす意味でもいいかもしれない」

　エノクとレビが頷くと、ゼパニヤも頷き返した。

「それでは。……今、この旧校舎では三つの事象が同時に進行しています。ひとつは幽霊騒ぎ。これはまぁ……放っておいてもいいでしょう」

　彼らが旧校舎へ乗り込む動機となった事件ではあるが、今となっては幽霊の真偽など瑣末なことだ。だが、もしかしたら――他の事象と強い関連があるのかもしれない。

　例えば……

「もうひとつは旧校舎に出入りしているらしい誰か。侵入者と名づけましょう。目的は不明ですが、痕跡から考えるに、それなりの昔から旧校舎に出入りをしていたと考えられます」

　足あと自体は数日前、雨の降った翌日に残されたものだろうが、窓が外されていたのは今夜だ。おそらくあの建てつけの悪い窓そのものが秘密の出入り口であり、侵入者は何度となく旧校舎への出入りを繰り返していると見た方がいいだろう。もしかしたら初等部の見た幽霊とは、その侵入者である可能性も高かった。

「最後のひとつは――昇降口を破壊した、誰か。破壊者ですね。同じく目的は不明ですが、こちらは明らかな敵意と害意のもとに行動していると見ていいでしょう」

「警戒するべきは破壊者だな。戦意を持つものとの平和的な解決は難しい。いざ戦うとしても、あの壊しっぷりからすると戦闘力も高そうだ」

　愛剣を見ながらレビは言う。

　万が一を想定して武器を持ってきたわけだが、まさか本当に出番が回ってくるとは思わなかった。いや、まだ出番がくるとは限らない。このまま誰とも出会わなければ、剣が鞘から抜き放たれることはないのだ。

　仮に、である。

　仮に破壊者と遭遇したとして――はたして無事でいられるのか。

　相手を倒せるのか。

　倒せない場合は逃げ切れるのか。

　自分が傷つくのは構わない。そもそも旧校舎への侵入を言い出したのは自分なのだから。だが部員たちは違う。自分の好奇心に付きあわせただけだ。そんな彼らをこれ以上危険に巻き込んでいいものなのか――……

「ひとりとは限らないよ」

　レビの思考を遮るようにエノクが言う。

「侵入者もそうだけど。僕達のようにグループで行動しているかもしれない。それに、侵入者と破壊者が無関係とも限らない。同一人物の可能性も……そうでなくても仲間かもしれない。決めつけて行動するのは危険だと思う」

「――！」

　レビとゼパニヤはハッとする。

　たしかにその通りだ。今わかっていることは、立入禁止のはずの旧校舎には以前から誰かが忍びこんでおり、その誰か――あるいは誰かたち――は今夜も旧校舎にいるだろうということだ。

　そこから先は、すべて憶測。

　だけど……しっかりと考えていかなければならない、憶測だ。

　レビは顎に手を当て、目を伏せて、思考を鋭くさせていく。

　想定しうる最悪の事態は、旧校舎では誰かが何かを組織的、かつ秘密裏に行なっており、侵入者も破壊者も同じ組織の一員、鉢合わせたら即、戦闘……だろうか。

　もしもそうなった場合は――どうするか。

　相手の規模は？　実力は？　こちらの技は通じるのか？　接近戦は自分とゼパニヤで対処するとして、ガラテヤは戦力にならないし、エノクは――できるならば戦わせたくはない。彼が戦闘行為を嫌っているのはよく知っている。しかし彼の召喚術の力は強力無比であり、戦闘になれば手を貸してもらわざるをえないかもしれない。

　それでも、相手に届かなかったら。

　待ち受ける結末は――……

「……」

「レビさん？」

「…………潮時、かもな」

　呟くような部長の言葉は、珍しく、悔恨の色が滲んでいた。

「一度引こう。どうにもこの旧校舎は胡散臭い。私たちの手には余る大事が秘められているのかもしれん」

「――ですね。僕たちで調べられることは調べました。あとは先生方にお任せするべきかと思います」

　ゼパニヤは、そしてエノクは部長命令に頷いた。

　ちょっとした悪戯心と好奇心が、何かとんでもないものを暴こうとしているのではないか――そんな漠然とした不安と恐怖は、少年たちが背負い込むにはまだ重すぎる。彼らは勇者ではない。もちろん魔王でもない。ただの学生なのだ。

「すまないな。……お前の言うとおりだった」

　レビはゼパニヤへ頭を下げる

「いえ、その――……謝らないでください。レビさんが旧校舎に惹かれた理由もわからないことはないですから」

　事実、魔王の幽霊という存在に惹かれて、ゼパニヤは折れたのだ。

　ゼパニヤは幽霊の存在は信じていない。だが彼は魔王という存在に惹かれた探求者なのだ。たとえ嘘だろうと思う噂話でもそれを突き詰めねば気が済まない。……ああ、きっと、どのような道を辿ろうと、自分はここへ来たのだ。不法侵入を試みるようなことはできなかっただろうが、何がしかの方法で旧校舎の幽霊に白黒はつけようとしたはずだ。だからレビの提案に理性で反論しつつも、感情で頷いていた。そんな自分に謝られる資格など、きっとない。

「僕だって、……旧校舎へは、興味がありましたし」

「ふ……そうか」

　気を使っていると思われたのか、レビは少しだけ悲しそうな顔をしたあと、微笑んだ。

　彼女にそんな顔をさせてしまったことを、ゼパニヤは心苦しく思う。

「…………。……そういえば、さ」

　重くなってきた場の雰囲気を変えようとエノクは話題を振る。

「旧校舎っていろんな噂があったよね。たしか――……ええと、かつて人体実験を行なっていた施設だったとか、かつて魔王を絶った処刑場だったとか、かつて神を神人へ貶めた契約の地だったとか――……」

「与太話でしょうがね」

　ゼパニヤはにべもなかった。

　だいたい、もしそれが本当だとしたら、そんな場所に校舎を建てるとか意味不明すぎる。

「――とも言い切れないと思っているがな、私は」

「レビさん？」

「ぶっちゃけ、この学園の上層部は胡散臭い。理事長はもちろんだし――教頭とか、見かけた記憶がないぞ」

「僕もありませんね」

「……言われてみれば」

　三人は首をひねり、考えこむ。

　……理事長や校長の姿は鮮明に思い描けるのに、何故か、教頭だけは像がぼやけている。

「……」

　視線を巡らせる。

　傷んだ木造校舎、そこから覗く月明かり。

　そう、そもそもここへ乗り込んだ動機といえば――……

「教頭先生、幽霊だったりして」

「いやいやいや」

　エノクの言葉に、全力で否定したのはゼパニヤだった。

「そんな何人も幽霊がいるわけないでしょう。第一、幽霊が教頭とかありえません」

「ふむ……だが校長はアザラシだぞ」

「生者と死者は大きな違いです」

「……ゼパニヤさん、やたら幽霊を否定するけど。何かあるの？」

「幽霊を否定したがってるわけじゃありません」

　ゼパニヤは一度目を閉じると、小さく息を吐きだし、言葉をつなぐ。

「僕が否定したいのは、魔王が死にきれず幽霊となった。そんな根も葉もない話ですよ」

「そうなの？」

「はい。……御存知の通り、僕の趣味は魔王研究です。世の中には様々な魔王が伝説として語られていますが、……旧校舎の噂の魔王は、化けてでるような方ではないと僕は確信しています」

　人を愛し、裏切られ、最後には破滅した魔王。

　それは――

　その生き方の、なんて鮮麗なことか。

「ですから、魔王の幽霊を実際に見たと聞いて、僕は彼女が馬鹿にされたような気持ちになりました。食堂でエノクに食って掛かったのも、元はといえばその感情が理由です」

「ゼパニヤさん、僕は――」

「ええ、わかってます。君は彼女を馬鹿にしたわけではない。初等部の生徒にしてもそうでしょう。ですからこれは僕が勝手に意固地になり、勝手に怒っていただけなんです。……それが、結果的にこういう事態を招いたのですから、僕の方こそ謝らないといけません」

　ゼパニヤはレビへと頭を下げる。

「すみませんでした。あなたにあんな顔をさせるつもりは、なかったんです」

「え――えぇ、と……」

　謝っていた相手から逆に謝罪され、レビは戸惑い――助けを求めるようにエノクを見た。エノクもまた、友人たちが謝りあう様子は見ていて面白いものではない。たしかに反省すべきことは多いが、それは無事に帰れてからだ。

「……この話は後にしよう」

　エノクは言う。

「誰が悪いとか、悪くないって話じゃないし。それより今は、目の前の問題をどうにかする方が大事だと思う」

「……ですね」

「ああ」

　レビたちは頷く。

　エノクもまた、頷き返した。

「うん。じゃあ、はやく帰りたいところだけど。――ガラテヤさん、遅いね」

「そういえば、そうだな」

「……大きい」

「待てエノク。お前はそれ以上なにも言うな」

「え、でも」

「わかってる。言いたいことはわかってるから、頼むからその先は口にしないでくれ」

「別にいいけど……」

　レビの謎の懇願に、エノクは不思議に思いつつも同意した。

「でも、確かに。――いくらなんでも、遅すぎます」

　ゼパニヤは立ち上がると、背筋を伸ばし軽くストレッチをした。

「僕が迎えに行ってきます。行き違いになるといけませんから、エノクとレビさんはここで待っていてください」

「大丈夫なのか？」

　心配そうなレビとエノクに、ゼパニヤは努めて力強い顔で微笑んでみせた。

「安心してください。この中で一番機動力が高いのは僕ですから。仮に破壊者と鉢合わせても、なんとか逃げ延びて見せますよ」

「ゼパニヤさん……」

「エノク、部長をお願いしますよ。――では、行ってきます」

　武道を心得た少年は、笑顔と、どこか緊張した面持ちを残しつつ、教室から出て行った。

　木造校舎を踏みしめる足音が次第に遠ざかり、やがて聞こえなくなる。

「……無事に、帰れるといいな」

「……うん」

　夏の夜――

　旧校舎の古ぼけた教室は、どことなく、蒸し暑い。

　レビは荷物の中から水筒を取り出すと喉を潤す。一息つくと、額の汗を拭った。

「……」

「……」

（…………あれ？）

　ふと、レビは気づく。

　――古ぼけた木造校舎の教室。

　そこはいつの間にか――――……エノクとレビの、ふたりきりだった。

　　　　　§

　……気まずい。

　ふたりきりになり、程なくしてレビが抱いたのはそんな感情だった。

　エノクとふたりきりになる機会などそう多くはない。教室や部活動ではたいてい第三者がいるし、私生活では会ったことすらなかった。放課後、お互いがどう過ごしているのかを自分たちは知らないのだ。

（……私は、何も知らないのだな）

　そう思うと、なんとも言えない寂寥感のようなものがこみ上げてくる。

　この感情の出処がどこなのか、レビにはわからない。

（……お前は、どうなのだ？）

　彼もまた、気まずいと思っているのか――この感情を共有しているのだろうかと、そんな傲慢な想いに突き動かされ、レビは隣に座っている少年へと視線を向けた。

「……」

　長い青髪はとても綺麗で、大きなリボンとよく似合っている。白磁のような肌はきめ細やかで、女子制服を着ていることと相まって、彼からは男を感じ取ることが難しい。性別を間違って生まれてきた人がいるとしたら、そのひとりは間違いなくエノクであろうと断言できる。

　……というか。

「どうして女物の服を着てるんだろう？」

「え？」

「あ――」

　どうやら考えごとが声に出ていたらしい。

「どうかした？」

「いや、特には。……ああ、違う、違う」

　ふるふると顔を振る。

　顔が赤くなっていくのを感じ、月明かりだけが光源となっている状況で良かったと思う。これならきっと、自分のみっともない表情も彼には見られていないだろう。

「レビさん、大丈夫？　顔赤いけど」

「ぎ――！」

　しっかり見られていた。

「……目がいいんだな、エノク」

「慣れてきただけだよ」

「そ、そうか」

　ふぅと吐息をこぼし、レビは体内の熱を吐き出していく。

　呼吸を落ち着けると、せっかくの機会なので、先ほどの疑問を直接投げかけてみた。

「……こんな時に聞くことでもない、実にくだらない質問なんだが――少しいいか？」

「うん。なに？」

「なんでいつも女の格好をしているんだ？　お前は別に――心は女、というわけではないだろう？」

　心も男、体も男。

　なのにどうして女の格好をしているのか、それがずっと疑問であった。

「うーん……」

　エノクは答えを整理しているのか、難しそうな表情で首を傾げる。

「……特に理由なんてないかも」

「は？」

「母さんがさ。着せたがるんだよ。僕が物心ついた頃からずっと。可愛いものが好きなんだって」

「それは――難儀だな」

　変態か、と思ったが面と向かって相手の母親をなじるような真似はしないレビである。

「僕もおかしいなとは思うんだけど、母さんには育ててもらった恩もあるし、楽しそうにしてるならいいかなって。――まぁ、さすがに中等部にもなってこれは恥ずかしいから、そのうちやめさせるつもりだけれど」

　スカートの端をつまみ、エノクは困ったように笑った。

「むぅ……」

「……レビさん？」

「――ああ、うん。すまない。妙なことを聞いた」

　レビは目を伏せる。

　なんというか、知る必要のない家庭の事情とやらが少しだけ垣間見えた気がして、居心地が悪くなってしまう。もっと愉快な展開を期待したのだが的外れもいい所であった。

　それにしても、自分の息子に女装を強いる母親とはなんなのだろう？

　たしかにエノクには男物の服より女物の服の方が似合っている。伊達に見た目が美少女ではないのだ。ただ、それを嬉々として行う母親と、受け入れる息子というのはレビには理解しがたかった。

（こういうのも、マザコンというのか？）

　一方、沈痛な面持ちで黙りこんでしまったレビの様子に、エノクはやはりこの格好はドン引きされているんだなぁと改めて思う。女装自体に大きな抵抗はない。なにせずっとそうして生きてきたのだから。だがエノクは男だ。中等部に入り、周りの男子が男らしく育っていくさまを見るに、自分はこのままでいいのかと不安になってしまう。

「ふぅ……」

　エノクは長い青髪をいじりながら、深いため息をつく。

　それきり――会話は途切れる。

「……」

「……」

　場を沈黙が支配する。

　あまりの居心地の悪さに、レビがちらりと横目で見れば、エノクはまるで赤点をとった学年首席のごとき落ち込みようだった。自分が余計なことを言ったせいだろうと思ったレビは、なんとかこの空気を変えようと思案し――

「――そういえば、ゼパニヤは言っていたな。魔王の幽霊なんて信じないと」

「え、あ、……はい」

　出てきた話題は、ひどく、つまらないものであった。

「誇り高き魔王が化けて出るはずがないと。愛の為に戦った魔王が、そんな未練を残して逝くはずがないと。……それもひとつの考え方なんだろう。でも、私は違うんだ」

「はぁ」

　気のない相槌をうつエノク。

　相手が特に興味のない話題であることをよく理解しながらも、一度話しはじめた魔王への想いは、なかなか止められなかった。

「誰かを愛するとか、嫌うとか、そういう感情はとても生々しい。そんな感情に溺れて世界を敵に回した彼女は、彼の言うような気高き乙女ではないと私は思う。もっと私たちに近い――普通の人だったのではないかとな」

「普通の人は、世界相手に戦争なんてしないと思う」

「ふ……たしかにな。行動力は人一倍だったのだろう。だけど、彼女自身は愛と憎しみに振り回された哀れな女のはずだ。――そう思ったからこそ、私は彼女に憧れた」

　レビはエノクの顔を覗き込む。

　その赤い目に自分が映っていることが、なんだか気恥ずかしい。

「私たちのようなただの人でも、強い思いさえあればなんでもできる。どこまでも羽ばたける。最期がどうなるかはわからないが……幼い私は、強い女性としての魔王に憧れたんだ」

「だから、魔王部を？」

「ああ、作った。――子供の頃の憧れを、未だに引きずっている未練がましい女なのさ、私はな」

「……そうだったんだ」

「エノクは、魔王に憧れたことはあるか？」

「ごめん、特にない」

　即答する。

　ほとんど成り行きで魔王部に身を置いているが、彼自身は魔王という存在へ興味を惹かれたことはない。スタンスとしてはガラテヤに近かった。

「どんな事情があろうと、世界に争いの種を撒いたって時点で、僕は彼女のことを好きになれそうにないから……」

「だと思ったよ」

　苦笑しながら、レビは言う。

「エノクは優しいからな。むしろ同意されたら困るところだ」

「臆病なだけだよ……」

「臆病でもいいじゃないか。戦場に立つ勇気があるのは戦士だけで十分だ。お前は戦士じゃないだろう。普通に生きて暮らしていく、そういう姿が似合う人だ」

「レビさんは違うの？」

「ああ。私はいつか、魔王になる」

「それは――」

「安心しろ。別に世界を相手に戦争するつもりはない。私にはそんなだいそれた力もないしな。ただ、その気概だけは持ち続けたいと思う」

　何を相手にしようと、自らの感情に従い、迷うことなく駆け抜けた。

　その生き方を再現なんてできない。

　だけど、焦がれ、真似ることくらいは……できるはずだ。

「私は――そういうでありたい」

　そう力強く言い切る彼女の姿が、エノクには、とても眩しくて――……

「やっぱり……レビさんは強いよ」

「よせ。あまり褒められると、…………その、照れる」

「……僕は」

　エノクは自分の胸を押さえる。

　どくり、どくりと脈打つ鼓動とともに、黒い何かが全身を巡っていくのを感じる。抱くことすら恥ずかしいと思えるその感情の正体は、きっと、嫉妬だ。

　レビのことはかっこいいと思う。夢を持ち、そのために歩み続ける覚悟がある。強い人なのだ。そんな彼女といることで、エノクは自分の女々しさに嫌というほど気づかされてしまう。

　いくら言葉で男だと主張しようと、中身以前に外見すら伴っていない。本当に男らしくありたいのなら、とっとと母を説得すればいいのだ。むしろ母と喧嘩してでも少年としての矜持を貫くべきではないのか。だがエノクはやらない。そこまでの必然性を感じていないから、やらない。

　エノクは男である。

　正真正銘、男である。

　だけど――どこまでも、女々しい男なのだ。

　そんな自分と比べて、レビのなんとたくましいことか。本人に言ったら不興を買いそうだが、エノクは純粋にレビのことを尊敬し、だからこそ嫉妬もしていた。

　情けないと思う。

　友人に嫉妬してしまう自分も、弱く女々しい自分も――すべて含めて、恥ずかしかった。

　どうすれば、先に進めるのだろう？

　考えるも……答えは見つからない。ただ、今のまま、このままではきっと、生涯かけても自分の追い求める場所へは届き得ないだろうと直感していた。

　そこへ至る方法、先へ進むための道標。

　それはなんなのだろうとエノクは考えて――

「――うわあああああああああああああああああああああああああああああ！？」

　どこかから聞こえてきた悲鳴に、意識を現実に引き戻された。

「！？　今のは――」

「ゼパニヤさん！？」

　レビとエノクは視線をかわすと、すぐに立ち上がり教室を飛び出した。懐中電灯を手にする手間さえ惜しみ、全速力で悲鳴が聞こえてきた方向へ駆けていく。

　暗い廊下も、今に限っては恐怖の対象ではあり得なかった。

「私が、馬鹿だったんだ！」

　愛剣を手に、レビは自分の迂闊さを呪う。

　どんな理由があろうと仲間を単独行動をさせるべきではなかった。ガラテヤを探しに行くのなら全員で――違う、それでは行き違ってしまったら最悪だ。もっと先、ガラテヤをひとりにさせた時点で選択を誤っていたのだ。

「く……」

　これでゼパニヤやガラテヤに何かあったら、自分はどう責任をとるのだろう。

　自分ひとりでとれる責任ならばいい。だけど、もしも問題が他の誰か――例えば学園全体にまで及ぶような事態になったとしたら、それこそ死んでも死にきれなかった。

（違う！　今はそんな事を――！）

　物事を悪い方向に考えていたら、現実でもそうなってしまう。

　今はただ無心に足を動かし、ゼパニヤの元へ駆けつけることにのみ専心する。そこから先は……なるようになれだ。相手が憧れの幽霊だろうと、謎の侵入者だろうと、破壊者だろうと構わない。魔王部部長として自分がやるべきことは、部員を無事に連れて帰ることなのだから。

　と――

「……！」

　後ろを付いてきていたエノクが息を呑んだのがわかる。

　レビもまた、足を止めていた。

　旧校舎二階・中央校舎の廊下。

　月明かりが差し込む中――ふたりの前に、誰かが、いた。

　それは赤かった。

　血のように赤い服を着ていた。

　手足はある。透けて見えたりもしていない。その存在に陰りはなく、夜闇の中でもひとりの生命としての鼓動を力強く輝かせている。幽霊などではない、エノクやレビよりも何歳か年上だろう――ひとりの少女。

　旧校舎に入って以来、はじめて出会う、誰かであった。

「シス、ター……？」

　エノクはつぶやく。

　色こそ赤いが、彼女が着ている服はシスターのものだ。

　だが彼女が普通のシスターであることはあり得ないだろう。こんな時間にこんな場所にいることもそうだし、たたずまいにもスキが見当たらない。おそらくレビやゼパニヤのように、何がしかの戦闘の心得があると思われた。

　事実、少女は両手に特徴的な突起がついたガントレットを装備していた。おかげさまで、清廉潔白を旨としたシスターの出で立ちとしてはどこかチグハグとしている。

　黒でも白でもない、珍しい赤いシスター服に加えて、ガントレット。

　その意味するところをエノクは知らない。

　だけど、暗闇に浮かぶ赤い少女の姿は、――たとえようがないほど、不吉に思えた。

「君は……！」

　エノクの問いかけに、赤い少女は静かに顔を上げる。

　そのまま、すっ……と腕を伸ばすと、エノクたちをビシっと指さした。

　よく通る声が月明かりの廊下へと響き渡る。

「ふふん、やっと会えたわね幽霊ども！　このアタシが直々に成敗してくれるわ！」

「っ――！」

　ゾクリ、とした。

　少女の声は明るかった。発言内容は大外れもいいところだが、快活な人柄を連想させる、気は強そうだが生き生きとした明朗な声だ。

　故に、エノクの背筋は寒気立つ。

　敵意や害意をないまぜにした悪意そのものとでもいうべき感情を瞳に宿し、なのに、金色の髪からのぞいた彼女の表情はとても嬉しそうだったのだ。まるで十年ぶりの恋人との再会に心躍らせる乙女のようで、…………それはあまりにも、おぞましかった。

　エノクは知る。

　掛け値なしの悪意というものを。

　そうして理解する。

　彼女こそが、文字通りの破壊者なのだと……！

**【3／旧校舎の戦い】**

　ガラテヤは自身の容姿を評価していない。

　父も母も兄も従兄弟も叔父も叔母も祖父も祖母も平均以下だし、まして父親そっくりと言われる自分の風貌に無い物ねだりをしてもしょうがないとすでに悟っている。特に身近にエノクのような男のくせに女みたいに綺麗な奴がいると、そっち方面での期待など抱きようもなかった。

　身の丈を知る、というやつだ。

　だからガラテヤは中身を磨くことにした。

　見た目で劣っているのなら、心でイケメンになればいい。

　そう思い立ったのがいつだったか――。結果、ガラテヤは飄々とした自分というものを心がけるようになった。仲間たちのムードメーカーであり、お調子者だけど決めるときには決め、飯をたらふくおいしそうにかっこむ、そういう人間になろうと努めてきた。思春期に入ってからは、加えてエロい話題も意図的にふり、食いつくようにした。

　それが自分だ。

　それがガラテヤなのだ。

　この生き方が、はたして吉とでるのか凶とでるのかは、まだわからない。心のイケメンを気取っても彼女すらできないくせに、どういうわけかガラテヤという生き方が楽しくて仕方がないのも不思議だ。手段と目的の境界が曖昧になったまま、ガラテヤという男は完成したのかもしれない。

　つまるところ。

　用を足し終えたガラテヤは、手を洗わなくても許されるのだ！

　これがエノクやレビだと許されない。

　美形は大変だなぁと思う。ちなみに意図して手を洗わなかったのではなく、水が流れなかったために仕方なく、だ。小便だからまだよかったものの、これがうんこだったら大変であった。さすがのガラテヤもうんこだと気分が悪い。

（少し遅くなっちまったなー。きっとうんこだと思われてんだろーなー）

　遅くなったのには理由がある。

　最初に見つけたトイレは蜘蛛の巣が鬱陶しいくらいボロボロに朽ちており、使う気になれなかったのだ。次のトイレも同じで、結局は階段を上がり三階にまで足を運んで用を足すこととなった。さすがは旧校舎、小便ひとつでめんどくさい。

「ま、いーけど」

　ガラテヤは夜の旧校舎を平然と歩いて行く。

　旧校舎に誰かがいることなど忘れ去っているかのごとき気軽さだが、彼は別に若年性痴呆症でも、レビが思っているほどバカでもない。ただ恐れる必要を感じていないだけだ。

　以前より秘密裏に旧校舎へ出入りしているらしい、侵入者。

　昇降口を破壊して旧校舎へ真っ向から入り込んだ、破壊者。

　たしかに不安を煽る存在ではあるだろう。

　しかしガラテヤは、いるかもわからない誰かなど、ちっとも怖くはなかった。

　ゼパニヤ辺りに言わせるなら危機感がないのだろうが、怖がっているばかりでは先へ進めないし、仮に何かあったとしてもその時はその時、イイオトコである自分なら上手く切り抜けられるはずだと根拠もなく信じていた。

　そんな事よりも噂の幽霊ちゃんだ。ガラテヤは幽霊ちゃんを見るためだけにここまで足を運んだのだ。幽霊ちゃんの正体や、魔王伝説との繋がりなど細かいことはどうでもいい。ただ、会いたい。会ってスカートの中を覗きたい。てゆーか幽霊って服脱げるのか？　エロイことはできんのか？　彼の関心事はその一点につきた。

　しかしその情熱も、当然、成果がなければしぼんでいく。

「ふぁ……ねみぃーなぁ」

　あくびを噛み殺しながらエノクたちの所へ戻っていく。

　その、途中。

　ふいにガラテヤは、足を止めた。

「……お？」

　教室のひとつ。

　月明かりと懐中電灯だけが頼りの世界に、どういうわけか、淡い光が確認できる。

　トイレに向かったときは見なかった灯りだ。

　例えるなら、そう――暗闇に浮かぶ、火の玉のように。

　例えるなら、そう――まるでそこに、幽霊がいるかのように。

　それはゆらゆらと、教室の中からひっそりと存在を主張してきていた。

「……んー」

　ガラテヤは顎に手を当て考え込む。

　友人たちを呼ぶべきか否か、悩んだのは一瞬だった。呼びに行ったスキに逃げられたら意味がない。優先すべきは自身の欲望であり、それは時には友情すら凌駕するのだ。

　というわけで。

「こんばんは、幽霊ちゃーーーーん！」

　ガラリと勢いよく扉を開き――

　目にした光景に、ガラテヤは目を瞬かせた。

　　　　　§

「ゆ、幽霊！？」

　自分でも恥ずかしくなるくらいの大絶叫を上げたあと、ゼパニヤは我に返り身構える。

　トイレへ行ったっきり帰ってこない友人を捜していた彼の目の前に現れたのは――闇に溶けこむような、長い黒髪の少女、だった。

「…………」

　少女は答えない。

　ただ赤い瞳で、自分を見てくるだけだ。

　ゼパニヤは息を呑み、……ふたりはしばし、視線を交わす。

（……いや、違う。……幽霊じゃあ、ない）

　訂正する。

　少女が余りにも儚げなものだから一瞬勘違いしてしまったが、目の前の存在は確かな実態を伴った生命である。ぼうっと光ってもなければ半透明でもないし、足もある。なにより、両手にしっかりとダンボールを抱えた幽霊なんて、ゼパニヤは聞いたことがなかった。

「――君、は？」

　油断せず問いかける。

　少女が幽霊であろうとなかろうと警戒を解く理由にはならない。現在この旧校舎には不審者が入り込んでいる可能性が高いのだ。この黒髪の少女がそうじゃないとは言い切れない。いつでも戦闘に移行できるよう、呼吸を整え、体内のマナを昂めていく。

「……」

　少女はダンボールを足元に下ろすと、ペコリとお辞儀をする。

「……私は、シフォン。黒歴史学園中等部、三年二組」

「中等部……」

　ゼパニヤは思考する。目の前の少女の言うことが、どこまで信用できるのか。

　彼女は制服ではないし、学年が違うとはいえ今まで見かけたこともない。本当に生徒なのかがまず疑わしい。だが、それにしてはスラスラと自分の問いかけに答えてきた。あらかじめ考えていた嘘だとしても、調べればすぐにバレるようなことを言うだろうか。いっそのこと生徒手帳の確認でも――……

（……いや、相手からしたら僕が不審者なのか……）

　当然といえば当然の事実に今さら気づき、ゼパニヤは少しだけショックを受けた。

「あなたは？」

「あ――僕は、ゼパニヤといいます。中等部二年、五組、……です」

　素直に返事をしてしまった。

　よくよく考えてみれば、こんなに可憐な少女が不審人物だとは考えにくい。いや、夜の旧校舎にいる時点で不審人物といえばそうなのだが、それはお互い様だし、少なくとも破壊者の類ではないだろう。

　根拠はある。体捌きは戦闘経験とは無縁の素人のものだし、自分に対する敵意や害意は少しも感じ取ることができない。これが演技なのだとしたら騙されて死んでも幸福だと、そう納得してしまうほどのまっさらさだった。

　むしろ、少女からは周囲への関心の希薄さを強く感じてしまう。

　それが、少女をより儚げに見せている理由かもしれないと、ゼパニヤは思った。

「後輩？」

「……に、なります」

「そう」

　話はそれで終わりとばかりに、シフォン先輩はダンボールを抱え直すと立ち去ろうとする。中に何が入っているのか知らないがそこそこの重さがあるらしく、少女の細腕ではちょっとだけ危なっかしかった。

「……僕が持ちますよ」

「……」

　少女は無言で立ち止まると、じーっと、静かにゼパニヤを見つめてくる。

「えーと……」

　なんだか照れくさくなってくるゼパニヤ。

　シフォンはそのまま黙考し――しかし、荷物を抱えたまま再び歩き出した。

「あ、あの！」

「……」

　シフォンはもう反応さえ返さない。

　ゆっくりと、ゼパニヤを置いてけぼりにして歩いて行く。

（ええと……）

　困惑しながらも、ゼパニヤは考える。

　本当ならシフォンに構っている余裕はない。魔王部の友人たちと一緒に、この怪しげな旧校舎から一刻も早く立ち去らなくてはいけないはずだ。優先すべきことは決まっているのに、では、あの先輩をこのまま放置していいのかと問われれば――迷ってしまう。

　彼女が自分たちの敵であるとはどうしても思えない。

　なら……彼女も不審者に襲われる危険があるのではないか？

　いや、エノクも言っていたが決めてかかってはいけない。柔軟な思考が自分には足りないと常々思っていたのだ。考えろ、考えろ、考えろ、考えるんだ、ゼパニヤ。彼女がやはり敵である可能性もしっかり考慮して、

「……」

「あ、ま、待ってください！」

　階段の上へと少女の姿が消えた途端、ゼパニヤは思わず駆け出していた。

　　　　　§

「ふふん、やっと会えたわね幽霊ども！　このアタシが直々に成敗してくれるわ！」

　威勢よく宣言してから、数秒。

「……」

「……」

「……」

　……沈黙。

　エノクもレビも、応えない。

　無反応のエノクたちに気を悪くしたのか、赤い少女は露骨に顔をしかめると乱暴に頭をかいた。セミロングの金髪が乱れ、さらに眉間の皺を濃くすると、舌打ちしながらすぐさま手櫛で直していく。

「――待て。……私たちは、幽霊じゃないぞ」

　そんな赤いシスターに、レビは状況の説明を試みる。

　エノクは改めて自分たちの部長はすごい人だと感心した。レビの声はどこか乾いている。彼女だって目の前の破壊者に恐怖を感じているだろうに、緊張と動揺を押し隠し、冷静に対応しようとしているのだ。

「私たちはこの学園の生徒だ。……私は中等部二年五組、レビ。こちらはエノク。わけあって旧校舎にいるが、決して怪しいものではない」

「ふーん」

　赤い少女の反応はそっけなかった。

　まるで目の前の相手がどこの誰だろうと関係ないと言わんばかりのその態度に、エノクの胸中を再び嫌な予感が占めていく。

「アタシはミコト。ミコト・ヴィスウェン。赤歴史学園高等部一年、幽霊の噂を聞きつけてやってきたわ」

「赤……？」

　意外にも赤い少女は名乗り返してくれた。

　それにしても、赤歴史学園とは予想外の名前が出てきたものだ。エノクが知る限り、赤学は唯一神を信仰するとある教会が運営している宗教学園で、その盲信っぷりは自分たち以外はすべて敵だと言わんばかり。もちろん多種多様な種族が通う黒歴史学園とは犬猿の仲――……だったはずだ。

　そこに通っているという赤いシスター、ミコトとやらは、どうして黒歴史学園の旧校舎にいるのだろうか……？

「ひとつ、聞きたいんだけど」

「なにさ」

　嫌な予感を払拭するかのように、エノクは思い切って問いかける。

　ミコトは相変わらず、表面上はすごくフランクに答えてくれた。

「旧校舎に侵入したのは……君なのか？」

「蹴破ったのなら私ね」

「どうして、そんな」

「決まってるじゃない」

　ほくそ笑むミコト。

「――――アンタたちを、ぶっ潰すためよ！！」

　瞬間だった。

　ミコトは目にも留まらぬ速さで廊下をけるとエノクへと襲いかかる。放たれるのは右手の拳打。ガントレットで武装されたそれは、直撃すればエノクの美しい顔も無残なことになりかねないだろう。――しかし、その瞬間、レビが割って入り剣で受け止めた。マナとマナがぶつかり合い、衝撃が廊下にこだまする。

　強襲が失敗したことを悟ると、ミコトは後退した。

「なかなかやるわね」

「――どういうつもりだ！」

「何が？」

「いきなり襲いかかってきた理由を訊いている！！」

　激昂しているレビに対し、あくまでもミコトは穏やかだった。

　……いや、違う。

　これは、穏やかなのでは、なく……

「耳悪いわね。アンタらを始末するって言ったでしょうが」

「ぼ――僕らは、幽霊じゃあ」

「どうでもいいのよ、そんな事は」

　ミコトはエノクたちを睨みつける。

　憎悪すらこもった眼差しに、冷たい汗が背筋を濡らす。エノクは言葉を失った。

「黒歴史学園――魔族や妖怪が巣くう、邪悪なる学園。幽霊もそりゃあ、駆除しなくちゃいけないけれど。ぶっちゃけそんな小者よりもアンタらみたいなアクマを仕留めることこそがアタシたちのお仕事なのよね」

「な――！　そんな、僕らは！」

「というわけで。赤歴史学園の名のもとに、アンタらを成敗するわ！」

　再びミコトは廊下を駆ける。

　先ほどの戦闘で先に倒すべきはレビであると悟ったのか、今度はエノクへは目もくれずレビへと一直線に跳びかかり――ガントレットと剣が交差した。

　月明かりの廊下に、火花が散る。

「ぐ、ぅ」

　戦いにくさにレビは呻く。

　手数はミコトの方が多く、こちらは拳撃をなんとかさばくのが精一杯だ。ミコトの出鱈目に振るわれる拳は武道を学んだゼパニヤのそれとは程遠く、故に始末が悪い。格下ならばお粗末な攻撃も、格上が放つならば理不尽なものへと成り代わる。なによりやりにくいのは、こちらが攻撃に出ようとするたびにその出鼻をくじかれることだ。

「くそ――！」

　おそらくだが、剣撃戦闘での立ち回りを理解しているのだろう。それだけ多くの剣士と戦ってきたのか、あるいは本人が剣に馴染みがあるのか。どちらにせよ、レビにとってはことごとくやりづらい相手だった。

「はは、どうしたのかしら！　手応えがないわよ！！」

　ミコトは笑うと、拳ではなく蹴りを放つ。

　不意打ちに対処しきれず蹴撃は腹部に命中する。マナのこもった一撃は、重く鋭い。まるで鉛球を食らったかのような衝撃にレビは小さな悲鳴を上げ、廊下を横転した。すぐさま立ち上がるも、軽いめまいに襲われ……片膝をつく。

「レビさん！」

　エノクはレビの元へと駆けつける。

　レビは、辛そうだった。悔しそうだった。折れそうな心を、鋼の精神で無理やり叩きなおし、恐怖と後悔を飲み込み立ち向かおうとしている。

　そんな部長の様子に、エノクもまた、唇を噛み締めた。

　ミコトを睨みつける。

「君は、本当にシスターなのか！？」

　黒歴史学園にもシスターはいるが、この赤いシスターのように横暴では決してない。わけのわからない理由で、一方的な憎しみをぶつけてくるだけの存在の、どこが神に仕える乙女だというのか――！

「……無駄だ、エノク」

「レビさん！？」

「赤いシスター服は教会の戦闘部隊の証と聞く。彼女たちは自分たちの神が定めた異端を滅するだけの狂信者だ。……私たちの常識など通用しない世界の人間なんだ」

「おかしなことを言うわね」

　ミコトは腰に手を当て、わざとらしくため息をついてみせた。

「アクマの常識が、アタシたちに通じるわけがないじゃない」

「――、この――！」

　レビは再びミコトへと立ち向かっていく。

　……彼女の気持ちは、エノクにも痛いほどわかる。

　ミコトの発言は何から何まで容認できない。認めてしまえば、それは黒歴史学園を否定することと同じだ。様々な立場の、様々な種族の、様々な人々が同じ場所に集い、生活する――その温かさを、素晴らしさを、すべて踏みにじることと同義だ。

　だからこそ許せない。

　この悪意しかない女に屈することだけは、してはならなかった。

「……」

　エノクは胸のペンダントに触れる。

　赤い宝石が埋め込まれたペンダントは、エノクの唯一の戦闘手段であり、同時にこの場を逆転させる最後の手段だ。悔しいが、今の自分たちではミコトを倒すことはできない。憎らしいくらい強いあのシスターを追い払うには……奥の手を使うしか、ない。

「……っ」

　手が震える。

　足も震える。

　怖い。ミコトが、ではない。もちろん恐ろしい相手ではあるが、今は義憤の方が優っている。だから、恐ろしいのは召喚術の力だ。召喚術をもって戦闘行為に参加することが、どうしようもなく恐ろしい。戦局をひとりで左右するほどの力は、まだ中学生である少年にとっては大きすぎる。

　だけど……

「――、やるしか、ない。僕が、やるんだ」

　瞳を閉じる。

　ペンダントへと意識を集中し幻想を幻視し昇華する。そこに浮かび上がった刻印は、喚ばれし者の心臓であり魂だ。自身のマナと、周囲のマナが彼の者の血肉となり、実像を結び――ほどなくして、それは現れた。

　巨大な体躯と、力強い炎の。

　旧校舎の廊下を埋め尽くすように立ちふさがったのは――炎の魔神、イフリート。

「うっわ、何よあれぇ！」

「――！？」

　突然出現した炎をまとった半裸のマッチョマンに、ミコトは素っ頓狂な声を上げ、レビは驚きに目を見開いた。

「……召喚術。エノク、お前は――」

「レビさん、離れて！」

「っ――！」

　レビは急いでミコトのそばから飛び退いた。

　直後、イフリートは咆哮する。召喚主の想念に応え赤いシスターを打ち倒すべく、両手より炎の塊を打ち出していく。一発、二発、三発――四発。最後にひときわ大きな炎を放つと、炎の魔神を構成するマナは急速に薄れ、霞むように消え去っていった。

「……すごい、な」

　呆然と召喚獣の暴れっぷりを見ていたレビは、感嘆の声を漏らす。

　エノクの召喚術を見るのはこれがはじめてではないが――やはり圧倒されてしまう。炎を操るという意味ではイフリートも同系統の魔術も同じなのに、その存在感、質、含まれる想念は格が違う。世界を侵す、まさにその一端へと踏み込んだ術が召喚術なのだ。

　そして、それを操るエノクもまた、強い。

　召喚獣が召喚術師の幻想によって生まれる以上、あの炎の魔神を生み出したのはエノクの心だ。戦いを嫌う彼がどれほどの思いでアレを紡いだのか、本当のところはレビにもわからない。だけど、彼は、女性みたいな容姿をした少年は、仲間の危機に、学園への侮辱を前に立ち向かったのだ。その心の強さは、彼がただの弱い少年ではないことを証明していると、レビは思った。

　それにしても――

「……少し、やりすぎなんじゃないのか？」

「う……」

　ふたりの視線の先は、未だに深い爆煙に包まれている。

　木造校舎の中でぶっ放された炎の召喚術。

　どうやら火事にはなっていないようだが――オンボロ校舎を震わせるだけの圧倒的な熱量が放たれたのである。旧校舎も心配だが、ミコトと名乗ったあの少女もただではすまないだろう。じわり、じわりとエノクは自分の解き放った力の大きさを実感し、戦慄する。

　……死んではいないはずだ。

　召喚術は術者の想念を具象化する。だから、エノクが相手を殺す気で放ったのならともかく、そうでないのならがせいぜいが手ひどく傷めつける程度のはずだ。それでも心配してしまう。相手は女の子なのだから、消えない傷でも残してしまったら大変だ。もしそうなったら、どれだけ謝れば許してもらえるのだろう。

「！？　――エノク！」

「え？」

　ふいに轟くレビの悲鳴。

　小首を傾げたエノクの視界を――、突風とともに、一筋の閃光がはねていく。

「……」

　意識が追いつかない。

　何が起こったのか理解するより前に、まず感じたのは、少しだけ体が軽くなった違和感だ。次いで、それが自らの青色の長髪が肩口あたりで切断されたことが理由だと気がついた。事態を理解していくたびに、心が急速に凍えていく。

「え？」

　バラバラに切断された肩口の髪を触りながら……エノクは、振り返った。

　駆け抜けていった突風。

　その先では、両手のガントレットの突起物からマナの白刃を放出している赤いシスターが、厭味ったらしくほくそ笑んでいた。

「こいつ……！」

　レビの声は絶望的だった。

　エノクもまったく同じ気持ちだ。切り札だった召喚術。それが通じなかった。あの炎の連撃をどうやって切り抜けたのかは定かではないが、現実として、エノクの幻想よりも赤いシスターは高みを行っていたのだ。

　もはや、打つ手はなし。

　どうしようもなかった。

「ふぅん」

　ミコトは薄ら笑いを浮かべたまま、すれ違いざまに切り裂いてやったエノクの髪を見下ろした。豊富な髪が廊下に散乱しているさまは、まるで青い血溜まりのようで、アクマを彩るにふさわしい光景だった。

　肩をすくめて、口端を歪め、これでもかと白々しく、言ってやる。

「あーらら。ごめんなさいね、髪は女の命なのに」

　と――

「……」

「……」

　アクマふたりの、反応が薄い。なんか妙なことを言った奴を見るような目でこちらを見てくるし、実に胸糞が悪い。最初もそうだったが、ノリの良くない奴は誰だろうとミコトは嫌いなのだ。

　……ややあって、青い髪をザンバラにした『少女』が、肩を震わせながら口を開く。

「ぼ……僕は、男だ！」

「――ハァ？」

　ボクハオトコダ。

　なんだろうソレは。新手の呪文だろうか。もしかしたらアクマたちの言語なのかもしれない。それにしては聞き覚えがあるような。ボクハオトコダ。ボクハオトコダ。ボクハオトコ、ダ。ボクハ、オトコダ。ボクハ、オトコ、ダ。僕は……

「――って、はぁあああああああああああ！？」

　面白い顔をしながら、あんぐりと口を開くミコト・ヴィスウェン。

「……マヂ？」

　恐る恐る、女剣士へと問いかけるも――彼女はあっさりと、だけど重々しく頷いた。

「マジかよ」

　まじまじと、少女――じゃない、少年を見る。

　月明かりの下でもわかる、絶対的な美少女だった。

　これが……男、だと……？

「……なんかムカツクわね。死ねばいいのに」

　吐き捨てるように言うと、ミコトは身構える。ガントレットから生成されたマナの刃が一回り巨大化し、あからさまに危険な香りを発していた。

「……！！」

　これは、やばい。

　本格的に、やばい。

　エノクとレビは差し迫った危機に息を呑む。相手は……本気でこちらを潰しにかかっている。死んでもいいと思っているとしか思えない。狂気を宿したシスターは、神の乙女ではなくついに死神へと成り果てた。

　……その引き金を引いたのが、自分が男だという事実にある気がして、エノクは無性に腹立たしくなった。

（そんな理由で――レビさんを、これ以上、苦しませるなんて……！）

　絶対に許されることではない。

　レビのことだけではない。ここでの敗北はエノクたち個人のものではない。赤歴史学園という狂信に黒歴史学園が負けるに等しいのだ。友人たちのためにも引くことはできない。これはもはやエノクたちだけの問題ではないのだ。

（思い描くんだ。もっと――もっと強い、幻想を！）

　イフリートで叶わないのなら、その先を。

　赤い死神に届き得る幻想を。

　自分たちを救ってくれる、誰かを。

　強く、強く、強く、強く、思い描く――！

「――！」

　今の自分たちでは届かない領域――それは魔王。ゼパニヤの願う、気高く誇り高い絶対の魔王。レビの願う、情念を抱えた強き女性。ガラテヤの希望は――ええと、スカート装備だったか。仲間の幻想をエノクが収束昇華し、幻想は力となり虚像を実像へと転換し現実を侵食する。

　紡がれるのは魔王部全員の願い。

　想いの結晶。

　その名は――！

「――魔戦姫、ベガリエル！！」

　エノクの叫びとともに――それは、世界に産声を上げる。

　まるで天使とも悪魔ともとれる神々しき女性の姿。白と黒の翼をはやし、全身に鎧をまとった麗しき金剛の戦乙女は、イフリートよりずっと小柄なのに比較にならないほどの戦闘力を秘めていた。

『――――』

　ベガリエルは、手にした大型ランスの矛先をミコトへと向ける。

　はじめてミコトの顔から余裕が消えた。

「は――！」

　ガントレットの刃を収め、懐より剣の柄を取り出す。ガントレットと同じくマナを収束し刃と成すそれはミコト本来の武器であり、すなわち今の彼女は混じりっけなしの全力全開であることを意味していた。まさかこんな奴ら相手に本気になるなんてと屈辱を覚えながらも、マナの刃を生成し、ミコト・ヴィスウェンは幻想の魔王と激突する――！

「ぉぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおお！！」

「いっけえええええええええええええええええ！！」

　エノクの想いを乗せて。

　魔戦姫もまた、吠えた。

『ブレイク・ザ・ワールド！』

「オウカソウソウ！」

　両者のマナが火花を散らし――――――……月夜の旧校舎は、光りに包まれた。

「……っ、う」

　体内のマナをほぼすべて吐き出して、それでもなお、ミコトの意識は途切れなかった。

　視界とともに一瞬、全身の感覚を喪失したりもしたが、すでに自身をとりもどしている。

「は――！」

　片膝をつき、息も荒いが、気分はすこぶる高揚していた。強敵を斬り裂いた感覚が手にしっかりと残っている。あの幻想の魔王は、この手で確実に息の根を止めてやったのだ。

　事実、眼前でベガリエルとやらは崩壊していく。

　溶けるように、幻想は幻想へと還っていき――……

「……そこまでだ」

　消えた幻想の向こうから、レビとかいう女が、自分へと剣を突きつけてきた。

「……」

　レビの目は、暗く冷たい。

　剣の切っ先は震えながらも、しっかりとミコトの頭部へと狙いをさだめている。今の消耗しきったミコトでは逃れることは不可能だろう。

　アクマどもに敗れ、こうして片膝をつき、命すら握られている。

　思わず、笑みがこぼれた。

「レビさん！？」

　エノクは叫ぶ。

　非難じみたその声が、思いの外、癇に障った。

「――どうしたの？　殺らないわけ？」

「……ふざけたことを言うな。私たちはただの学生だ。人殺しなどしてたまるか」

　怒りを滲ませながらも、レビははっきりと否定する。

　自分たちは、お前たちとは違うのだと。

「――ちっ」

　ミコトは小さく舌打ちをする。

　やがてレビは、ゆっくりと剣を収める。

　それを見届けると、エノクは真摯な声で赤いシスターへと語りかけた。

「……ミコト、さん。この学園は、たしかにいろんな種族の人が通っている。だけど、それだけなんだ。生徒も先生方も、みんな楽しくやっている――そういう、普通の学園なんだ」

　見かけは異常かもしれない。

　仮にも神を名乗る存在と、魔の眷属とが同窓となる。さぞや歪で不浄で狂いに狂い、堕ちに堕ちた常識の埒外の世界に見えることだろう。

　でも、真実は違う。

　黒歴史学園。

　種族や立場なんて関係ない。個性豊かな教師たちが、これまた個性あふれる生徒たちを育て、育てられていく。時にはぶつかり合い、時には協力し、結果として笑いあう。他の学園との違いなんてない。それは当たり前の学び舎の風景だ。

　だから――

「僕たちを、信じてほしい」

「……」

　ミコトは無言だ。

　相変わらず憎しみを宿した瞳で、エノクたちを睨んでいる。

　いったい何が彼女をそこまで駆り立てるのだろう。エノクはミコトの憎悪の根源が気になりはしたが、それはきっと、さっき出会っただけの自分なんかが触れてはいけないことだろう。自分たちに黒歴史学園生徒としての想いがあるように、ミコトにはミコトの信念があるはずだ。おいそれと踏み込むような真似は、してはいけない。

「――はん」

　ミコトは鼻を鳴らす。

「……アザラシが校長やってるとこの生徒が、よくもまぁ言えたものね」

　直後だった。

　悪態をつくとミコトは跳ねるように大きく後退し、そのままバック転を繰り返しながら瞬く間に旧校舎の闇の中へと消えていく。最後のマナを振り絞っただろう鮮やかな逃走劇に、エノクとレビはしばし呆然と見惚れてしまった。

「……えぇと……。帰った、のかな？」

「おそらく。今の彼女に私たちを制する力は残っていないはずだ」

「仲間がいたり……しないよね？」

「多分な。あの口ぶりでは単独行動だろう。旧校舎に幽霊が出たという話をどこかから聞きつけ、功績を上げるために先走った……そんなところか」

「だと、いいんだけど」

「怖いこと言わないでくれ。あんなのの相手はもうしたくない」

「僕もだよ……」

　そんな会話を交わしつつも、油断はしない。

　……さらに、数分。

　本当にミコトが撤収したらしいとわかると、なんとかこの場を切り抜けたという実感がひしひしと湧いてくる。明らかに格上の強敵を相手に、切り札を超える切り札すら創造し、かろうじで黒歴史学園の誇りを守り通すことができた。その余韻にひたりながら、エノクは熱い吐息をこぼす。

　世界から見れば、きっと、他愛のない夏の夜の出来事だ。

　実態だけ見ても、少年少女が悪戯を起こし、あげく喧嘩しあっただけだろう。

　それでも当人たちにとっては――……あまりにも衝撃的な、一夏の思い出だった。

「あ……」

「レビさん？」

　エノクと同じ胸の高鳴りを感じていただろうレビは、一足先に現実へと回帰すると難しい顔で考えこむ。

「――そういえば、ゼパニヤを助けに行く途中だった」

「あ――」

　そうだった。

　すっかり忘れていたが、事態は予断を許さない感じだったはずだ。いつまでも勝利の余韻に浸っているわけにもいかない。

「急ごう、レビさん！」

「……いや、いったん教室まで戻ろう。時間をとられすぎた。破壊者は退けたんだ。ゼパニヤの身に大きな危険が迫っているとは考えにくい」

　ゼパニヤは戦闘での立ち回りの巧さだけならば魔王部一だ。もしもミコトやそれに準じる相手がいたとしても、彼ならばうまく切り抜けているだろう。それにゼパニヤだって移動しているはずだ。結果として足止めされてしまった今、聞こえた悲鳴だけを頼りに闇雲に捜すのは上策とは思えない。ならばゼパニヤを信じて教室で待っていた方が無難だろう。

「……そうだね。うん、そうしよう」

　エノクは頷く。

　レビも頷き返し――ふと、何かに気づいたように目を見開き、ついで複雑な表情でエノクを見つめてくる。視線に気づいた少年は小首を傾げた。本人は意図していないのだろうが、相変わらずそのしぐさはすごく可愛らしい。

　ただ同時に、今となっては、すごく物足りなくもあった。

「レビさん？」

「いや、な……」

　言い難いのか、レビは口を動かそうとして、何度となく逡巡する。

　そのらしくない様子にエノクはしばし考えて――足元を見たとき、答えへと行きついた。

「……ああ。これ？」

　廊下に散乱している青い髪。

　毎日手入れが大変で煩わしく感じたことはあったけど、それでも大胆に切ることはしなかった自分の髪。それがまさかこんなカタチで失われることになろうとは、誰が予想できただろう。

「…………その、ずい分と……さっぱりしたな、と思って」

「うん。そうだね」

　エノクは自らの髪に触れる。

　腰下まであった長い髪は、今は、肩口までになってしまった。

「……」

　散った髪を見たときは、さして心は痛まなかった。当然だろう。髪は女の命だーとはミコトの台詞であり、レビのこの反応をみる限り意外とマジなのかもしれない。つまり少年であるエノクにとっては関係がない。伸ばしていたのだって母がそう望んでいたからで、エノク自身に特別な思い入れはないのだ。

　だから正直、切断されても、別にかまわないと思っていた。

「……」

　なのに、今頃になって、じわり、じわりと、染みこんでくる。

　それは未練だ。

　それは寂しさだ。

　肩の辺りで不揃いに切られた髪にふれるたび、エノクの胸中は悲しみに満ちていく。

　当たり前といえば、当たり前だった。

　なにせ、幼少期より自分を形作っていた記号のひとつが、ポロリと欠けてしまったようなものなのだから……

**【4／旧校舎の幽霊】**

　シフォンの目的地は、屋上だった。

　屋上へつくと、シフォンはダンボールの中をあさりはじめる。取り出したのは折りたたみ式の小さな椅子と座布団、星座早見盤だ。椅子に座るとシフォンは夜空を見上げる。星座早見盤を手に持ったその姿は、天体観測に望む少女のように見えた。

「……」

　ゼパニヤは所在なさげにきょろきょろする。

　つい後を追いかけてしまったが、はたして、これでよかったのだろうか。もしかして――もしかしなくても、ガラテヤに「おほう、ついにゼパやんも女の尻を追いかけられる男になったのか」などと言われかねない状況なのではないだろうか。……いや、別にやましい気持ちがあるわけではない。ついさっき会ったばかりの女性にそんな気持ちを抱くような、ふしだらな男になったつもりもない。

「……」

　だけど、現にゼパニヤはシフォンの近くで、すっかり手持ち無沙汰になっていた。

「…………、あの……」

　意を決し、ゼパニヤは恐る恐る声をかける。

「……ここで、何をしているんですか？」

「星を見てる」

「……」

　それは見れば分かるのだが――どうして旧校舎でこんな事をやっているのか、それが気になったのだ。

「……」

　かける言葉を探しながら、ゼパニヤは空を仰ぐ。

　綺麗だった。

　月を囲むように、黒いキャンバスには無数の星々が瞬いている。

「……」

　再び視線を少女へと戻す。

　シフォンは手に持った星座早見盤には目もくれず、変わらず夜空を眺めている。まるで広大な夜の闇に呑まれ落ちていくかのような――嫌な錯覚にゼパニヤは身を震わせた。

（先輩は……）

　彼女は……星座観察へきたわけではない。

　本当に星を見にきたのなら、こんな虚ろな眼差しで、こんな綺麗な空を見ていられるはずがない。赤い瞳はただ淡々と夜空を映し続けているだけで、そこにシフォンという個人の意志を感じ取ることが、どうしてもできないのだ。

　いや、違う。

　彼女は自分の意志でここにきて、星を見ている。なのに、そこに彼女の意志を感じられないだけだ。自分でも意味がわからないが、ゼパニヤはこの直感がそう的はずれではないだろうと半ば確信していた。

　例えるなら――命令されたコマンドにただ従う、ロボットだろうか。

　シフォンは星を見ている。

　だけど、星を見ているわけでは、ないのだ。

「……」

　旧校舎には幽霊がいるという。

　ならばその正体は、やはり彼女なのだとゼパニヤは思う。

　生きていようとそこに確たる芯がないのならば、幽霊も同然だ。たしかに彼女は儚く美しいが、それが自身の喪失に基づくものであるとするならば、悲しいことだ。

　もったいないと思う。

　そんな虚ろな顔ではなく――心から微笑むだけで、彼女はきっと今よりも何百倍も何千倍も何億倍も何兆倍も、魅力的になるはずなのだから。

（……僕は、ガラテヤか）

　なんだか思考が友人に毒されている気がする。

（――って、そうだ、ガラテヤ！）

　自分はあのひょうきん者を捜していたのだ。いつまでもこんな所で油を売っていては、エノクやレビに心配をかけさせてしまう。

　とは言え……

「……」

　シフォンを、この虚ろな少女を、このままにしていいのだろうか。

　旧校舎には不穏な気配が漂っている。彼女がそれに関わっているのかいないのか、それすらもわからないが……仮に関わっているとしたら、それこそ、無理矢理にでも助けださなくてはいけないのではないか。

　彼女の手をとり、走り出すべきなのではないか。

（僕は……）

　ゼパニヤは、胸を焦がす謎の焦燥感に突き動かされていた。

「あの――！」

「……」

「――――、……」

「……」

「…………」

　シフォンは、応えない。

　ゼパニヤは、悔しさに拳を握りしめた。

　彼女は自分を無視をしているわけではない。ただ……声が届いていないのだ。彼女の世界はきっと、驚くほど狭い。おそらく今夜の出会いもシフォンの中ではさしたる意味も持たないのだろう。もしかしたら、明日には忘れ去られてしまうのかもしれない。

（僕、は……）

　ゼパニヤは幻視する。

　彼女の殻を壊し、手を取り、連れ出してやれたら、それはきっと――

「……」

　――違う。その役目は自分ではない誰かのものだ。

　今もこうして彼女に怖気づいているような自分では、何をどうやろうと声が届くことはない。少しだけでも言葉を交わせたことが、そもそも奇跡に等しかったのだ。

「……」

　拳を握りしめたまま、星空を眺める。

　本当に――悲しいくらい、美しい夜だ。

　ゼパニヤは自分がこんな感傷に浸っている理由もわからず、それでも星に願う。

　どうか、彼女に救いがあることを――……

「……では、先輩。いつか、また」

　深々とお辞儀をすると、後ろ髪を引かれながらもゼパニヤは屋上を後にした。

　　　　　§

　ガラテヤが見つけたものは、幽霊ではなかった。

　獣人――いや、亜人か。

　教室の隅で震えるように座っていたのは、ひとりのオークであった。

「ち、ハズレかよ」

　毒づくガラテヤ。

　見渡す限りでは火の玉らしき光源も見当たらず、先程見たのは全部幻だったのではないかとさえ思えてくる。狸や狐ではなく豚に化かされたなんていまいちカッコがつかず、ガラテヤはボリボリと頭をかいた。

「おい、お前。そんなとこで何してんだ？」

「ぶひぃぃー……」

　オークは答えない。

　どうも何かにビビっているようにも見えるが……

「……喋れないのか？」

「喋れるブヒ！」

「それならいいんだが。――お前、名前は？　どこのクラスだ？」

「コジローだブヒ。クラスは……ないブヒ」

「ない？　……ははーん、わかったぞ。お前が侵入者か」

　思えば幽霊騒動の発端もガキどもの肝試しが原因だった。このオークもそういう手合いなのだろうとガラテヤは思う。

（ったく、最近のガキは面倒だねぇ）

　もっとも、オークの年齢などガラテヤは知らない。黒歴史学園には実年齢数万歳のものもいれば、片手で足りてしまうものもいる。聞いた話じゃ初等部にはいい年した兄ちゃんが何故か紛れ込んでいたりもするらしいが――まぁ、そんな奴らが教師や生徒として散らばっているような混沌とした学園なので、降って湧いたオークという存在もガラテヤはあっさりと受け入れていた。

「ぶひぃ……」

「あー、ほら、そんな目すんなよ。外まで連れてってやるからよ」

「ぶひ？」

「感謝しろよ。俺が女以外にサービスするのは例外中の例外なんだからな」

「ぶひ！」

　言うとコジローは立ち上がりトコトコと近寄ってきた。どうも懐いてはくれたらしい。

（やれやれ。まさかガキのおもりをするハメになるとはなぁ）

　美女幽霊を見にきたのに、とんだ計算違いである。

　これなら侵入者や破壊者と遭遇した方がなんぼかマシだったかもしれない。もちろん相手が美女か美少女であることが最低条件だが。侵入者をストーキングしたり、破壊者と拳を交え合ったり――ああ、想像するだけでなんというパラダイス。

　それがよりにもよって、豚だとは。

（ん、待てよ……）

　ガラテヤはコジローと名乗ったオークへと問いかける。

「なぁお前。男なんだよな？」

「ぶひ」

　唐突な質問に首を傾げるコジローだが、すぐにコクリと頷いた。

「だよなー」

　どうやら今夜はとことん女に縁がないらしい。

　教室を出ると、ガラテヤはエノクたちの待っている二階へ戻るべく足を向ける。ちらりと後ろをうかがうと、コジローはしっかりとついてきていた。置いてけぼりにしないように、適度に歩幅を調整していく。

（さて。あいつらになんて説明すっかな）

　迷子の子豚を保護しました。置いていくわけにはいかないので連れ帰ります。

　……たったこれだけの話なのだが、状況が状況だけに信じてもらえないかもしれない。侵入者やら破壊者やら肝試しやら、なんでこの旧校舎はこんなにも人が集まってくるのだろう。どいつもこいつも暇人なのだろうか。……そこまで考えて、自分と愉快な仲間たちも暇人に当てはまることに気づき、訂正する。好奇心が旺盛なだけなのだ。

　そんな事を考えていると――

「お？」

「あ」

　階段にさしかかったところで、上階から降りてきたゼパニヤとバッタリ遭遇する。ガラテヤが「なんでこんなトコロにいるんだ」と疑問を口にするよりはやく、どことなく不機嫌そうな口調でゼパニヤは詰め寄ってきた。

「見つけました！　まったく、いつまでトイレに行ってるん、です、か……？」

　ゼパニヤの目線がゆっくりとコジローに向かっていく。

「その子は？」

「さっき拾った。多分侵入者だ」

「……そうですか」

　一瞬、ゼパニヤが複雑な表情を浮かべた。クソ真面目な友人のことだから、コジローに対してあまり良い心象を抱きようがないのだろう。……そういえば、肝試しをやったという初等部のガキンチョの話の時も、ひとりだけすんげぇ機嫌悪そうにしていた。

「迷子ですか？」

「さぁ。どうなんだろうな」

「……適当ですね」

　ゼパニヤは目線の高さをコジローに合わせると、優しい声で話しかける。

「君は、どうしてここに？」

「ぶひぃ……」

　しかしコジローは、そそくさとガラテヤの後ろに隠れてしまう。

「はは、警戒されてやんの」

「む――」

「なぁなぁ、ゼパやんよ。こいつ……コジローってんだけど、置いてけぼりにするわけにはいかないし、外まで連れて行こうと思うんだが」

「……いいんじゃないですかね」

　憮然とした顔でゼパニヤは頷いた。

　反論される可能性も考えていただけに、ガラテヤは拍子抜けする。

「……なんですか」

「いや、やけに素直だなと思って」

「あなたは僕のことをただのわからず屋だと思ってませんか？　その行動が正しいと思うなら、別に反対なんてしませ――」

　その時だった。

　……ズゥゥゥゥゥゥゥ……

「なっ！」

　突然、旧校舎が小さく揺れる。

「おいおい、地震か？」

「ぶひ！」

「いえ、これは――」

　地震……では、ないだろう。揺れ方が不自然だった。むしろ何かの魔術が炸裂したような感覚に近い。誰かと誰かが、戦っている……？

　ゼパニヤの中で、嫌な予感が急速に膨らんでいく。

「なんかヤバゲだな。こりゃあ、とっととレビんとこへ戻ったほうがいいか？」

「――」

「ゼパニヤ？」

「え、ああ……そうですね。はやく、合流しましょう」

「……お前、大丈夫か？」

　真剣な顔で天井を見上げ――おそらくは、その先にある何かを心配しているらしき友人に、ガラテヤは問いかける。ゼパニヤは軽く頭を振ると、しっかりとした眼差しで友人に応えた。

「大丈夫です。……行きましょう」

「なら、いいんだがな」

　三人は、慎重に、だけど足早に、エノクたちが待っているはずの教室へと戻っていった。

　　　　　§

　結論から言うと、エノクたちは荷物を残して行方不明になっていた。

　荷物を置いて長期間はなれるはずがない――というゼパニヤの主張を信じ、待つこと数分。そそくさと帰ってきたふたりの姿……というか、主にエノクの変わり果てた様子に、ガラテヤたちはしばしかける言葉を失った。

　それでも、ゼパニヤはなんとか言葉を絞り出す。

「――どうしたんですか、それは」

「……うん」

　エノクはバサバサに切断された髪先をいじりながら、曖昧に頷いた。

「僕のことは、気にしなくていいから。ちょっと散髪したくらいに思ってくれれば、それで」

「いえ……そう言われましても。これ見よがしに髪をいじられていては、どうしても気になりますよ」

　ゼパニヤの指摘に、エノクは無意識に肩口の髪をいじっていたことに気がついた。

「ごめん」

「……色々あったのだ」

　うつむいたエノクの代わりに答えたレビであるが、その声音には隠し切れない疲労の色が見て取れる。まるで一戦交えたあとのようだった。

　ガラテヤは閃いた。

「お前たち、……どんだけ激しいプレイをしてたんだ！！　俺も混ぜろよ！！」

「すまんが、今はその手の冗談に付き合う気力はない」

「あ、そう」

　残念そうなガラテヤだった。

「…………何があったかと問われれば、昇降口を壊した犯人と遭遇した。戦って追い払った。それだけだ」

「マジでか」

「では、先ほどの揺れは……」

「私たちの戦いのせいだろうな」

　それを聞いたゼパニヤは、どこかホッとしたように息をついた。

「ところで、だ。……お前の後ろにいるのはなんだ……？」

　怪訝な表情でレビはオークの少年を見た。

「ああ。こいつはコジロー。迷子だ。なぁレビ、こいつを外まで連れてってやりたいんだけど、まだ幽霊ちゃん探しは続けるのか？」

「……いや、いい。もう帰ろう」

　レビは素直に頷いた。

　魔王部の四人は、いそいそと荷物をまとめると廊下へと出る。

　懐中電灯が夜闇を照らし、一行は帰路へとついた。

「そういえばよ、ゼパニヤ」

「……なんですか」

「お前さ、なんで四階になんていたんだ？」

「――あなたこそ、三階にいたでしょう。捜してもいないから、大変だったんですよ」

「そりゃあ悪かった。なにせ便所がきったなくてなぁ」

「……手、洗ったんでしょうね？」

　半眼のゼパニヤに、ガラテヤは肩をすくめて応えた。

　ゼパニヤとエノクとレビが一歩、友人から遠ざかった。

「……コジロー、お前っていい奴だなぁ」

「ぶひ？」

「そーいやさ、食堂のトンカツ、しばらく出なくなるんだってよ」

「……お前、今、何を見てその話を思い出した」

　レビの疑問をガラテヤはあえてスルーした。

「この間さ、俺が食ったので最後なんだぜ。おしいよなぁ、あん時、素直に俺とわけ合えばよかったのに。人生損してるぜ」

「そうなんだ。あれで終わりだったんだ……」

　髪の毛先をいじりながら、エノクは思う。

　エノクとしては食堂のカツはガラテヤのイメージが強い。まぁ、単に知り合いに好んでカツを食べる人がガラテヤしかいないというのが理由なのだが、あの食べっぷりが見れなくなるのはちょっとだけ寂しいと思えた。

「なんでも材料の調達が難しくなったとか。残念だよなぁ、すげー美味かったのに」

「ぶひ！」

　唐突にコジローが大声を上げる。

「ん、なんだよ」

「本当に、本当に美味しかったブヒか！？」

「美味かったぜ。絶品だった。アレがもう食えないとか、食堂の存在価値半減だな。割とマジで」

「そう、ブヒか」

　どことなく嬉しそうに笑うコジローだった。

　そうこうしているうちに、一行は旧校舎の外へと出る。行きと違い、破壊された昇降口から外へと出たのだが……こんな破壊を平然と行うような輩をよく追い払えたものだとガラテヤは感心する。

　夏の夜の風が、少しだけ心地いい。

「……まだ気を抜くなよ。家に帰るまでが冒険だ」

「遠足かよ」

　忠告してくるレビであるが、彼女本人がさっきまでに比べればいくらか肩の力が抜けている。それが自然と、一夜の冒険の終わりを感じさせた。

「さて、と」

　ガラテヤは大きく背伸びをすると、コジローへと問いかけた。

「お前、家は遠いのか？　送ってってやるけど」

「大丈夫ブヒ。すぐ近くブヒ！」

　コジローが指差すのは、魔王部の四人が帰る方角とは真逆だった。

「そっか。ならいいか」

「ありがとうブヒ！」

「――急に元気になりやがったなぁ、こいつ」

　苦笑する。

　本当なら家まで送っていった方がいいのだろうが、エノクとレビはヘトヘトで、ゼパニヤもどこか浮ついている。こんな友人たちを放って別れるのもあまり気が進まない。幸いながら迷子のコジローは元気がありあまっているようだし、家がすぐ近くだというのなら多分大丈夫だろう。

　四人とひとりは、昇降口で別れることにする。

「じゃあな。気をつけて帰れよ！」

「さよーならブヒー！　ありがとーブヒー！！」

　こうして、魔王部の旧校舎探索は幕を下ろす。

　結果だけ見れば、お目当ての幽霊は見つけられず、それどころか会わなくていいようなモノと会ってしまっただけの夜だったけれど――まぁ、迷える子豚を救えただけでも、それなりの意義はあっただろう。

　ガラテヤは一度だけ、振り返る。

　オークの少年は、いつまでも手を振り続けていた。

　　　　　§

　少年には不安があった。

　いつも絶品肉を提供し続けてきた。しかし――最後の最後、最期の肉は――確認することができない。血肉を賭したその行方を知ることができない。

　それだけが――心残りだった。

（でも、大丈夫だったブヒ）

　彼は言ってくれた。

　美味かったと。

　その言葉だけで――もう、思い残すことなど、何もない。

　　　　　§

「それにしても、結局幽霊なんていなかったなぁ」

「……すまん」

　レビは項垂れる。

「今夜はみんなに迷惑をかけた。私の力不足が原因だ。……本当にすまなかった」

「あー、まぁ、いいんじゃねーの？　みんな無事なんだし」

　ガラテヤは月を見上げながら、言う。

「今夜、俺たちがここに乗り込まなけりゃ、コジローの奴は迷いっぱなしだったんだろうし。それだけでも良かったじゃねーの。まぁ、魔王部のくせに人助けーってのもイマイチしまらないか」

「……ガラテヤ、お前は……」

　レビは少しだけ見直した。

　このちゃらんぽらん男は、意外と人に気を使える男なのかもしれない。

「……お前は――……いい奴、なんだな」

「違うぜ。イイオトコ、なんだよ」

「あの！」

　会話を遮るように、ゼパニヤは声を上げる。

　ガラテヤはせっかくのカッコいいセリフの邪魔をされ、不満全開でゼパニヤへと視線を投げたが――逆に、いつになく真剣な彼の面持ちに息を呑まされる。

　鬼気迫る、とはこのことだろうか。

　理屈ではない。

　真面目が取り柄のような少年が見せているのは、感情に突き動かされる男の顔だった。

「すみませんが、先に帰っていてください。僕、どうしても気になることがあるんです！」

　言うと、ゼパニヤは答えを聞かずに旧校舎へと走り戻っていく。

　残された三人は、呆然とその背中を見送るしかなかった。

「――なぁ、あいつ、何があったんだ？」

「……」

　ガラテヤの疑問に、エノクとレビも首を傾げるしかない。

　ただ……

「――うん、私は……ああいう顔は、嫌いではないぞ」

「え、何それ。フラグ？」

　　　　　§

　ゼパニヤは屋上へと駆けて行く。

　ガラテヤは言っていた。

　今夜、自分たちがここに来たことに意味はある――と。その言葉通り、彼は偶然出会っただけのオークの少年を助けたのだ。あのノリだけで生きているような軽薄な男が、堂々と誰かへ手を差し伸べたというのに――自分は、何をしているのか。

　もちろん、ゼパニヤとガラテヤとでは状況が違うだろう。

　だが、結果が伴わなかったのは、自分が臆病だったからに他ならない。

「……！」

　息も絶え絶えに、ゼパニヤは走る。

　旧校舎の暗闇を掻き分け、自分の成すべきことを成すために。

　そう――

　ゼパニヤは、あの少女のことが気になって気になって仕方がなかったのだ。

　そうして。

「あ……」

　屋上へ向かう途中、月明かりの射す廊下で、シフォンの後ろ姿を見かける。

　息を呑む。

　震える手足を必死に抑えこみ、精神を静かに昂ぶらせ――ゼパニヤは、声をかけた。

「あの……！」

「――」

　シフォンはやはり、応えない。

　後ろ姿のまま、こちらに振り返ることもなく、静かにその場にたたずんでいる。

「その……そのままでいいので、聞いてください」

　小さく、深呼吸を数回。

　最後に、大きく深呼吸をすると――少年は、意を決した。

「あなたがどうしてここにいるのか、僕にはわかりませんが……でも、今のままではいけないと思います。たしかに星空は綺麗ですが、本当に綺麗な星空は、ここからでは見られない。あなたは――ここを、出るべきなんです」

「……」

「あなたの意志で、あなたの気持ちで、星空を見ましょう。そのためなら、僕は何とだって戦える。だから、僕と一緒に行きましょう。あなたを縛っている殻は、僕が必ず壊してみせますから。ですから、どうか、僕を信じてください」

「……」

　ゼパニヤは手を差し伸べる。

　きっと彼女がこの手を握り返してくれるはずだと、そう信じて……

「……」

　想いが通じたのだろうか。

　ゆっくりと、……少女は振り返る。彼女の黒髪は月明かりにのせいか、どこか青にくすんで見えた。ゼパニヤは、力強く微笑んでみせる。――――が。しかし、先程までの無表情はどこへやら、彼女の顔に浮かんでいるのは、はっきりとした、苛立ちの感情であった。

「……あれ？」

「――うるさいなぁ。やかましいのじゃ、小僧」

　そして、煙のように、少女の姿はかき消えていった。

「……」

　沈黙。

「…………」

　沈黙。

「………………」

　やはり、沈黙。

「……？？？」

　ゼパニヤは笑顔をひきつらせたまま冷や汗を流す。

　やがて、長い長い、沈黙の果てに――――

「ゆ……ゆゆ、幽霊が出たあああああああああああああああああああああああああ！？」

　――――……少年は、今夜二度目の絶叫を上げるのだった。

**【エピローグ】**

　夏休みが明けた。

　登校してくる生徒たちの間には、まことしやかにとある噂が流れている。

　それは、旧校舎の噂だ。

　夏休み中から囁かれていた幽霊の噂は、ある夜を境に変質する。

　朝、用務員のお爺さんが気がついた時には、旧校舎東の昇降口が盛大に破壊されていたそうなのだ。その日から旧校舎には日夜厳重な警備がついて、ついには誰も出入りができなくなったという。

　しかし、噂話は加速する。

　警備費用を理事会で槍玉に挙げられた理事長が涙目だったとか、裏では競合する他の学園の暗躍があるとか、競合してない他の学園が黒幕だとか、はては政府の陰謀で人類が絶滅するとか。

　そういう、他愛のない噂に切り替わっていく。

　夏も時期に終わる。

　旧校舎の幽霊もまた、忘れ去られていくのだろう。

　　　　　§

「おはよう」

「おは……よう？」

　校門をくぐったところでエノクはレビにゼパニヤ、ガラテヤを見つけ、駆け足で追いつくと声をかけた。振り返った彼らは、あの夜以来、久しぶりの再会となる友人に笑顔で応えようとして――呆けたように目を丸くした。

　エノクは苦笑する。

「……予想してたけど、そんなに変かな、この格好」

「え――と」

　いち早く正気に戻ったゼパニヤが、軽く首を振りながら、エノクの言葉を否定する。

「いえ、そんな事はありません。ただ……驚きました」

　赤いシスターにざっくり切断されてしまったエノクの髪は、今は綺麗にショートカットに揃えられている。少女と間違えられることが多かったロング時代と違って、これなら少年でも通じるだろう。

　なにより――エノクが着ているのは、男子制服だった。

　長髪から短髪へ。

　女子制服から男子制服へ。

　そこにいるのは、紛れもない、ひとりの少年だった。

　だからだろう。

「お、おおおお、おま、お前……！　なんてもったいないことを！！」

　ガラテヤは本気で嘆いていた。

　一方、レビは静かな声で問いかけてくる。

「――いいのか、それで。母親が悲しむんじゃないのか？」

「うん。反対してたけど……これも、きっかけだと思うから」

　たしかに自分を形作っていたピースのひとつは無残に剥がれ落ちてしまった。

　だけどそこから見える景色は、今までとは違って見えるかもしれない。中途半端だった自分から、少しでも先へ進めるのなら……変わっていけるのなら、そのためのきっかけにしたいと思ったのだ。

「ま……納得してるならいいんだが」

「うん。心配してくれて、ありがとう」

「……っ、あ、当たり前だろう」

　レビはぷいっとそっぽを向いて歩きはじめた。

　その頬がほのかに赤く染まっているのを、エノクは見逃さなかった。

　本当に、彼女は優しく強い人だと思う。

　　　　　§

　教室に入ったエノクを出迎えたのは、やはり級友たちの好奇の視線だった。

　夏の思い出話に花を咲かせていた喧騒はあっという間に鳴りを潜め、教室は潮が引くように静まり返る。数秒後、ひそひそ話から再開された朝の賑わいは、それぞれ悲喜こもごもの反応を見せていた。  
　例えば、一部の男子と女子はこの世の終わりとばかりに涙にくれ、かと思えば一部の男子と女子はやたらと目を輝かせている。

　エノクにはどういう事情で彼らの反応が両極端に分かれたのかよくわからないが、とりあえず完全否定されたわけではないようで、ほっと胸を撫で下ろした。

　そうして、自分の席へと向かう。

　教室の窓際の一番後ろ……という非常に目立たない位置取りながらも、エノクはこの席が気に入っていた。もともと注目を浴びるのは得意じゃなく、中等部に上がった当初も容姿の関係で何かと目立っていたエノクにとっては心安らげる数少ない場所だったのだ。それに、窓を開ければさわやかな風が吹き込んでくるのもお得感がある。

　だけど……

「あれ？」

　どういうわけか、自分の後ろに席が新しく増えている。教室を見渡しても夏休み前と配置は変わってはいない。いつの間にか席替えが行われていたということはなさそうだ。

　自分の席へと向かうレビと目が合う。

　彼女も増えた席のことは知らないようで、肩をすくめて答えてみせた。

「……転入生でも来るのかな」

　首を傾げるエノク。

　だとしたら、すぐ後ろの席になるのだし、仲良くできる子だといいなぁと漠然と思う。

　やがてホームルームのチャイムが鳴り、しばらくして教師が入ってきた。朝の号令も終わると、教師はある意味予想通りの言葉を口にする。

「あー、今日から新学期だが、まずは転入生を紹介する。……入って来なさい」

「はい」

　ざわつく教室の中、颯爽と入ってきたのは――ちょっと大人びた、金髪の少女だった。

「げ」

「な――っ」

　エノクは思わずレビを見る。レビもまた、驚いた顔でエノクを見返してきた。

　教師が黒板に転入生の名前を書いていく。

　それと合わせるように、上品に、金髪の少女はお辞儀をした。

「今日からお世話になる、ミコト・ヴィスウェンです。みなさん、よろしくお願いします」

　にこりと、ミコトは笑った。

（嘘……でしょ……）

　その後の話をエノクは覚えていない。たしか教師がミコトの説明をしていたようだが、ことごとくがエノクの頭を素通りしていった。とりあえず彼女に見つからないように顔を伏せる。冷静に考えるとまったく意味のない行為だったが、そも冷静に考えられる余裕がなかったのだからしかたがない。

　わけのわからない事態に、エノクは完全に現実逃避していた。

　しかし……

「……！」

　足音が近づいてくる。

　ハッとしたエノクは思わず顔を上げ――すぐ隣を通り過ぎる、ミコトと目が合った。

　にたりと、ミコトは嗤う。

　エノクはゾッとした。あまり目立たないはずのお気に入りのこの席は、今この時を境に全力で身の危険を感じ続ける針のむしろとなった。まさか授業中に後ろからザクッ……ということはない、だろう、が、嫌な予感は一向におさまらない。

　椅子を引く音と、座る音。

　転入生の着席を見届けると、教師は夏休み明けのありがたいお言葉を話しはじめた。

　もっとも、エノクはそれどころではなかったが。

「――どうして、君が」

　小声で問いかける。

　振り返ったりはしない。恐ろしくて、そんな事はできなかった。

　ミコトもまた、小声で答える。

「アタシ、借りはしっかりと返さないと気がすまないのよね」

「……だいたい、君は高校生だって」

「そんなの、の力を使えばどーとでも誤魔化せるわよ。どう、驚いた？」

「むしろ呆れたよ……」

　言いたいことは終わったらしく、教師は教壇を後にする。

　喧騒が教室に戻った。

　これから始業式のために生徒たちは体育館へと移動するわけだが、転入生がいるためかクラス全体がどうにも色めきだっている。具体的には、ガラテヤがさっそく粉をかけようと狙っていたり、ゼパニヤがそれをたしなめていたり――レビが憮然と警戒していたり。エノクもこれから先のことを考えるだけで、頭が痛くてしかたがなかった。

　ミコトは席を立った。

　彼女の手が、ポンとエノクの肩に優しくおかれる。

　エノクはビクリと体を震わすと、条件反射的にミコトの顔を見上げてしまった。

　視線が、絡み合う。

　彼女の顔には――――思わず目を背けたくなるような、素晴らしい微笑みが浮かんでいる。

「というわけで、これからよろしくね、エノク君？」

「……」

　エノクの背筋を、ぞわりと悪寒が走った。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　…… To Be Continued？